324-162

正二位伯爵 土方久元閣下題字
法學博士 磯部四郎閣下序文
辯護士 名合 孟先生序文
哲學博士 古屋鐵石先生著述

宗教奇蹟研究

明治
43. 1. 29
内交

東京
精神研究會

正二位伯爵土方久元閣下

序文

宗教の奇蹟として名高き彼の日蓮上人が龍の口にて白刃飜りて今や首を落されんとするに當り、日蓮自若として妙號を唱へければ、白刃段々に壞れたりといふ如き、又彼の耶蘇が重病者に手を當てたれば、重病者は忽然と健全體となりしといふ如き、奇怪至極なる傳說は迷信者を釣らんがため、無根の虛事を傳へしものにあらざるか否や、事實なりとせば科學の應用にて可能の事なるや否やにつき論述したるものなりとて余に序を乞ふ。

近頃は世人一般に精神學に志し、宗教問題に興味を持ち、殊に靈的不思議の現象を研究する傾向高し、依りて本書は其れ等の人の爲めに參考となる事尠なからざるべし、一言を記して序とす。

明治庚戌歳初月

法學博士　磯部四郎識

序文

裸蟲の長たる人間の智慧を以て宇宙の森羅萬象を悉く解說せんとするは到底出來ざる相談なり、本書は此出來ざる相談の一たる宗教上の奇蹟を今日の進歩せる科學を以て破らんと企てたる痛快の文字にして、鬼神の魔法を了得せんとする者の逸す可らざる參考寶典なり。

紀元二千五百七十年一月

辯護士　名合孟識

自序

宗教の奇蹟には如何なる不思議の現象あるかに就て調べたる中、興味ある者のみを此書に羅列せり、即ち耶蘇の奇蹟と釋迦の奇蹟及び佛教十一宗の奇蹟と神道十五派の奇蹟との顚末を記せり、而して其奇蹟は悉く事實なるか否かの問題に對して著者は學理上及び實驗上より事實なりと斷定せり、事實なれば吾人も之を行ひ得るかの疑問に對して、精神學の應用を以てせばより以上の不思議の現象を實現せしむることを得、現に著者は其れを實驗せり、其次第を記して著者の所說誤まれるか否か、等の諸問題に就て學者の教を乞はんと欲する者也。

明治四十三年一月元日

精神研究會長　古屋鐵石識

宗教奇蹟研究

目次

第一篇　總論……一
第一章　奇蹟とは何ぞや……一
第二章　催眠術と奇蹟との關係……三
第三章　宗教と奇蹟との關係……八
第二篇　基督教の奇蹟……一二
第一章　新舊二聖書中の奇蹟概觀……一二
第二章　耶蘇の行ひたる奇蹟……一三
第一節　葡萄酒變じて血となりパン變じて肉となる……一三

第二節　冷水變じて葡萄酒と化す……一六
第三節　海上を歩行し波濤を靜止す……一七
第四節　心力にて木を枯らす……一八
第五節　死人を蘇生せしむ……二〇
第六節　惡鬼を追拂ふ……二二
第七節　雲中より神聲を發せしむ……二三
第八節　魚口に金を生ぜしむ……二四
第九節　藥を用ひず重病を治す……二五
◉心靈魔法(クリスチャン、サイエンス)
第三篇　佛敎の奇蹟……四〇
第一章　佛敎經典の奇蹟概觀……四〇

第二章　釋迦の行ひたる奇蹟……四一
第一節　魔女を消滅せしむ……四二
第二節　提婆を不動金縛となす……四二
第三節　極樂世界を眼前に現はす……四三
第四節　六神通力を行ふ……四四
第三章　佛敎各宗の奇蹟……四六
第一節　木像首を動かす(臨濟宗)……四六
第二節　刀刃段々に壞る(日蓮宗)……四七
第三節　鰯の頭靈驗を顯はす(眞言宗)……五〇
第四節　空間に彌陀佛の像を現はす(眞宗)……五五
第五節　飛行自在の通力を示す(修驗道)……五六

第六節　奇々妙々の事を行ふ(天台宗)……五七
第七節　密呪にて蛙聲を止む(淨土宗)……五八
第八節　昆沙門天の木像動く(時宗)……六〇
第九節　幽靈の出沒(曹洞宗)……六二
第十節　引導を行ふ(黃檗宗)……六九
第十一節　座禪を行ふ(禪宗)……七〇
第四篇　神道の奇蹟……七八
第一章　神道の奇蹟概觀……七八
第二章　神道各派の奇蹟……七九
第一節　探湯式を行ふ(御嶽教)……八〇
第二節　交靈術を行へり(天理教)……八三

第三節　重病者を卽治せり(黑住教)……八六
第四節　忽ち雜念を去らしむ(禊教)……八九
第五節　蟇目の法を行ふ(大社教)……九〇
第六節　思ふ事を叶はしむ(金光教)……九一
第七節　一生涯安心を與ふ(修成派)……九二
第八節　守札の靈驗著し(神習教)……九三
第九節　禍を未發に防ぐ(神理教)……九四
第十節　劍渡を行ふ(大成教)……九五
第十一節　火渡を行ふ(神道教)……九六
第十二節　幽明界を明にす(扶桑教)……九八
第十三節　家運長久家內安全ならしむ(實行教)……九八

目次

第十四節　萬物一體の觀を現はす(丸山教)……九九
第十五節　疾病を治し幸福を得せしむ(蓮門教)…九九
◉仙術(片田源七)
◉魔術(ユーザビア)
第五篇　結論……一一〇
◉現代に於ける奇蹟の價値
◉奇蹟の行はるゝ學理上の根據及び其方法

終

宗教奇蹟研究

古屋鐵石著

第一篇　總論

第一章　奇蹟とは何ぞや

何事にはらず吾人が未だ曾て見ざる奇怪なる事柄に接する時は、之れに驚き之れを怪しみ怖るゝは人情の常なり、今我れ等が起居動作せる大地が忽然として大海に化し、或は白晝變じて闇夜と成り、青天に風雨起りて電雷轟き、水變じて火と成り、火變じて水と化すとか、或は又眼前に在る事物が煙の如く消え失せ、眼前の人が忽然と鬼神に化して空中に飛行する事などありとせんか、吾人は驚異措く能はず此の奇怪不可思議の事柄に對して驚怖すると同時に其由て來る原因の何物なるかを知らんと顧慮し、若し人智の及ぶ範圍にて明白に解釋し得ざる時は、他に何物か不可思議の在るありて其れが力に依りて此現象を生起せしむるものとなす、これ

未開人民の自然に赴く傾向なり、さて斯樣なる奇怪不思議の事柄を學問上殊に宗教哲學の上の言葉にて奇蹟と云ふ、奇蹟とは英語にてミラクル(MIRACLE)といひ原語は何事によらず奇怪不思議の事柄を指す意味にて基督教にては主として此の語を用ゆるは勿論佛教に摩訶不思議とか靈驗とか奇瑞などいひ、神道諸派にて神變といひ、效驗といふが如きも、皆此の奇蹟を言ふなり、例せば基督教の聖典中に散見せる水を變じて葡萄酒と爲し、病人を治癒し死人を蘇生せしめたりといふ物語の如き佛教經典の殆んど全部に見るを得べき、大地の震動光明赫変諸佛諸天の不思議力其他各宗教上に於て呪文を唱へ印を結び、加持祈禱等を以て雲を呼び風を起し、神通力を以て座ながら遠方の事を知ると傳ふる者の如き之れ即ち奇蹟なり、二十世紀に不思議なしとは、屢々たる科學の進歩が何物をも科學の眼を以て之れを洞觀してあらゆる疑問を解釋し說明し盡して餘す所なく、古來吾人が千古不明の疑團の如きも多くは科學的に解釋されたり、今の世に奇蹟を談ずるが如きは、尙千古未開の民と伍を同ふせる者とし、嘲笑さるゝに至らんとす、然れども翻つて宗教界を見れば歷史の多くは奇蹟なり、宗教ある所奇蹟のなきはなく、奇怪不思議の

事實は雲の如く、林の如く、吾人の眼前に勞鬱せり、此の不思議の雲に入り此の奇蹟の林を過ぎて、吾人が今日あるに至りたりとせば、奇蹟の研究は吾人の過去を知るに最も興味深き歷史なり、從て學者も宗教家も教育家も將た實業家に至るまでも研究すべき問題にあらずや、殊に近來催眠心理學の流行と共に、奇蹟の研究に從事するもの多き折柄、余が論述せんとする又徒事にあらざるべし。

第二章　催眠術と奇蹟との關係

奇蹟は實に不思議にして、常人の行ひ能はざる處、宗教と云ふ偉大の力を有する者にして初めて其れを能くするものなり、奇蹟の巧妙なる程其宗教の靈驗高き證左なりと云ふ宗教家あり、又宗教の奇蹟と云ふ者は其宗教に對する信仰心を高めしむるがため、迷信者を釣り込む手段として、常識を以て行ふと能はざる不思議の虛事を傳へたるものなりと云ふものあり、一概に斯く論じて宗教の奇蹟を以て虛事とせば宗教上の教義も亦信ずるに足らずと云ふことになり、其極は宗教の威信を損ずることゝなりはせざるか、余の考によれば之れ等の說は未だ究めざる所の說と

しか思はれず、其事は催眠術を研究したる者の等しく認識する所なればなり、勿論種々の宗教に於て奇蹟と稱して言ひ傳へたる事は悉く事實にあらざるべし、針小棒大は免れざるべし、然れども奇蹟と稱して言ひ傳へし現象は少しも跡方もなきことにはあらざるべし、故て其現象は不能の事にあらざるを以てなり、何となれば催眠術によりて宗教上に於ける奇蹟と稱する現象を起すことを得ればなり、尚此問題については以下順次論ずる積りなり、然り而して左に催眠術實驗の有様を記して、催眠術現象と宗教の奇蹟とは如何に密接の關係あるかを示さむ。

宗教奇蹟研究

(一)術者被術者に向つて傍に置きたる冷水を盛りあるコップを持ち、之は酒である、飲むと直に醉ふ、イザ飲むで見よと云ひつゝ被術者に飲ませれば、被術者は其冷水を飲んで酒の味あり、大に醉ふて赤面す、又術者は生な大根を切りたるを持ち、之は饅頭なり味美なるを以て食ふて御覽と云ひつゝ其生大根を與へたれば被術者は生大根を喰ひて饅頭の味あり、今度は術者椅子を指して美人立てりと云へば椅子は美人に見ゆ、庭前に鳴き居る雀の聲をオルガンの音なりと云へば雀聲はオルガンの音に聞ゆ、此現象を錯覺と云ふ、即術者に云はれし通り事實に反して感ずる也。

(二)術者被術者に向つて今池の水の上を角力が歩ひで居ると云へば、被術者には其云はれし通りに見へて、何故に水の上を歩ひで沈まざるかと云ふ疑心は少しも起らず、術者空間を指して何物もなきに彌陀佛現はれり、合掌再拜せよと云へば被術者には彌陀佛見へて有り難く合掌再拜す、術者被術者に向つて今我輩が空中を飛行するから見たまへと云へば、被術者の目には術者の身體空中に飛行すると見ゆ、何等の聲なきに今天に於て神が汝に幸福を與ふとの言葉を下されたり、其言葉を確に聞きしならんと云へば、被術者は確に聞きましたと答へて嬉し涙を流せり、此現象は幻覺と云ひて何物もなきに、術者が言ひし通りの物が五官に觸るゝなり。

(三)術者被術者に向つて、汝の足は敷物に堅く附着して離れず如何に離さんとしても離すこと能はずと云ひたれば、被術者一生懸命にて足を離さんとしたるも離れず、術者今度は樂に離ると云ひたれば、樂に足は離れたり、術者被術者の手を堅く握らしめ、開くこと能はずと云ひたれば、被術者開くこと能はざりし、術者今度は樂に開かると云ひたれば樂に開けり、此狀態は催眠術上に於ける止動狀態と云ひ、身體何れの部分にても働を止め、又其働を活潑ならしむることを得。

(四)術者腰の立たぬ病人に向つて、其患部を掌にて撫でやり、最早自在に歩める、歩みて見よと云ふや、被術者立ちて活潑に歩めり、又或る狐憑病者に向つて汝の心は確然として利發となれり、汝の體より狐は逃げ去りたりと云へば、被術者は眞に健康となれり、術者腹痛甚しくて堪へ難き病人に向ひ、汝腹痛消へ失せりと云ふや、被術者は爾後腹痛を知らざりき、胸中常に煩悶に堪へざる大悲觀者あり、術者其者に向つて汝は快活な愉快な人となれりと云ふや、今迄の悲觀は消へて歡天喜地の樂觀者となれり、之れは催眠應用精神治療によりて病氣を治したる有樣なり。

(五)術者天井より女子の玩弄具の羽子を糸にて吊し置き、エイと一聲氣合を懸けたれば、羽子は動搖す、又細長き棒を地に插し置き、術者印を結びつゝ思念を凝したれば、棒は左右に動げり、之れは精神を無生物に感通せしめたるなり。(但獨此五例には甚だしき異論あり。)

以上の如き實驗例は枚擧に遑あらず、併し以上の五例にて大概催眠術現象の如何は推知するを得と信ずるを以て、爰に實驗例の列擧をは止め、催眠術にては催眠せしめて被術者を自然の睡眠狀態にあるかの如き有樣となし置かざれば、不思議のとは行はれざるものと思ふものあるも、其は未だ催眠術の事をよく知らず、催眠狀態の如何なるものなるかを知らざる故なり、催眠狀態は睡眠狀態とは大に趣きを異にす、催眠狀態は無念無想の狀態にて宗教に云ふ神に近づき或は神と同體なりと云ふ精神狀態なり、催眠者の外貌は恰も睡眠者の如くなるも、稀には催眠者の外貌は覺醒時の人に異ならず、立つて目を開き語を發し居り、素人には正氣の狀態にある人と催眠狀態にある人との區別は分らざるべし、感性の高き被術者に向つては別に何等の催眠法をも行はず、突然暗示するもよく云ふ通りとなるものなり。

次に一言し置きたきは豫期の作用と云ふことなり、必ず斯くなるべしと確信して疑はざれば、何事も全く其通りになるものなり、或る病人が余の宅へ來れば必ず痛み去る、施術も何もせざるに余の宅へ入るまでは痛みて堪へられざりし者が、余の宅へ入るや否やピタリと痛み去りて健康體のものに異らず、之れは余の精神の偉大なるを確信したる結果なり、換言すれば自己暗示の結果なり、神佛に對し誤りて不敬の事をなし罰當るならんと確く信じて心配をなし居れば必ず罰當るべし、然れども無神論者にして神を認めず、從つて罰なるものある筈なしと確信し居るも

の誤りて不敬のことあるも罰を受くるとなし之れ皆自己暗示の結果なり。

以上述べし丈にては催眠術のことを知らざる人には了解し難からむも、催眠術の講義をすることは本書の目的にあらざるを以て、詳細は專門に記せし催眠術書に讓り、爰には宗教の奇蹟を解釋するに最も必要なる處の催眠術上幻覺錯覺止動狀態催眠應用精神療法精神感通及び豫期作用の例を一二記せしに過ぎず、此六個の現象と以下に述ぶる奇蹟の現象とは原理同一のもの多かるべしとは、余の獨斷なり、余の獨斷誤まれるか否か殊に小冊子中に數多の奇蹟を論ぜんとしたる故所說は勢ひ淺薄を免れず且余は宗教家にあらず宗教に對しては全く門外漢なり、故に余の述ぶる處の多くは問題の中心を失し、宗教家の意に戻りたる處多かるべし、然れども余は宗教上には驚くべき偉大の力を有するを確信し、宗教上の信仰を高めんとする者なり、故に世人中宗教上の信仰乏しき者には余は信仰の必要を勸めんとする者なり。

第三章　宗教と奇蹟との關係

宗教上の奇蹟を研究せんとするには先づ宗教と奇蹟との密接なる關係を一言し置く必要あり。

凡そ哲學と云ひ宗教といふ其心理的起原も亦吾人が奇怪不思議なる事柄に對する時は、之れに對する驚異の念先づ起り、一般の究理心は自ら起りて之れが合理的解釋を試みんとし、知力の及ばざる所より、神祕的解釋となりてこゝに奇蹟を生ず、さて太古以來人智未だ開けざる時代にありて、かはる〳〵起り來る種々常ならぬ奇異なる現象に對し、之れに驚き怖れたる人々は、幼稚なる思想を以て合理的に之れを解釋し得ぬ所より、之れを宗教信仰の念に結び付けて、其時代の宗教家は巧に此の幼稚素朴なる思想を應用して、宗教に導き入るゝ手段となしたるもの多し、例せば基督教に於いて彼のカナ婚宴に於いて水が葡萄酒と化したる如き又耶蘇が惡魔につかれて病める者及び身體の病める者を治療せしといふは、今日より之れを見れば惡魔につかれしものとは、ヒステリー「エピンブシー」を病む者にして此の種の疾病者が催眠術上の暗示によりて治癒するは當然のことなり、又術者が催眠者に水を與へ

て酒なりと暗示すれば、催眠者は酒の味にて飲み醉ふて赤面すると同一理なり、又佛教に於て釋迦が韋提希夫人に對して爲せる奇蹟、又は提婆が釋迦を害せんとして身體の自由を失へるが如きも、自己暗示による身體の不隨狀態と見るを得べし、其他各宗を通して此種の例頗る多し。

されば此奇蹟に對する信仰は、宗教上最も重んずる所にして、野蠻未開時代の宗教若くは野蠻人の宗教に之れを有するは勿論、佛教基督教の如き文明の一大宗教に於ても晩近科學の影響を受けて、其教理の多くが拋棄せられんとするにも拘はらず、其信徒の多くは奇蹟あるを以て自己の宗教の誇とし、又新教育を受けざる宗教家にありては、自己の宗門の奇蹟の多からんことを示すに汲々たるが如し、こゝに於いて彼等の前には奇蹟なくては宗教存せず、宗教存する所必ず奇蹟の之れに伴ふは必然の狀態なりとす、隨つて教祖自らは正法に不思議なきを標榜して敢て奇蹟を行はざる者と雖も後世信徒が自己の教祖を尊信し、之れを潤色する爲めに附加增大せし事も少なからず、荒誕無稽の傳說不自然極まる迷信、之れに因つて生じ、大宗教の面目を損せし事も亦尠なからず。

こゝに於て各宗教上の奇蹟論は中世以來の大問題、大論爭の中心となりて、今尙諸說紛々として決せざるの觀あり、卽ち基督教に於いては聖書の絕對に信ずべくして疑ふべからざるを主張し奇蹟を信ずる福音教會あり、又歷史的奇蹟信仰を斷じて疑ふべからずと、教會の權威を以て强ゆるカトリック教あり、新教諸派は之れに反對して全然之れ等は一種の譬喩に過ぎずと爲すもの〻如き、佛教に於ても婆羅門教の儀式的方面を最も多く傳へたりと稱せらるゝ眞言宗の如きは、加持祈禱の盛んに嚴修さるゝを見ても、奇蹟を信仰上重要視し居るを見るべく、眞宗禪宗の如きは特に之れを厭ふも、尙之れなきにあらず、而して佛教全體に亘りて達觀する時は新舊二派の潮流ありて、一は合理的信仰を說いて之れを排し、他は經文傳說其儘を信じて頑として動かざる風あり、其他何れの宗教に於いても、斯樣に新舊二派の反目を見るも要するに奇蹟其者を全然根抵より除き去らんとするものなく、其の最も極端なる者にありてすら、教祖の傳記に傳へらるゝ奇蹟を「これ祖師の生涯を詩的に傳へたるもの」として尙存するを喜ぶもの〻如き、如何に奇蹟信仰が宗教と離るべからざる密接の關係あるかを知るに足るべし。

今吾人は茲に此興味ある宗教上の奇蹟を探り來つて、科學上の見地に立ちて粗末ながら少しく之れが研究を爲すべく試みんとす、これ何人にも興味深く、且つ心靈研究に志あるの士には、決して無用の閑事業にあらずと信ずればなり、乞ふ余をして先づ其經典バイブル等に現はれたる、奇蹟信仰の傳說を聊か諸君に語らしめよ。

第二篇　基督教の奇蹟

第一章　新舊二聖書中の奇蹟概觀

基督教は或る一面に於て奇蹟の宗教なり、試に其信徒の依て以て立つ所の聖書に就いて見よ、舊新二譯の聖書には奇異眩怪人をして喫驚せしむる事柄を以て滿たされたり、先づ舊譯全書を一瞥せんに、ヘンドールの口寄者(我國の笠女の如き者)がサムエルの靈を招きしといふ如き、(サムエル前書廿八章)又創世記にはロートの妻が鹽の柱と變ぜしといふを記し、出埃及記には蛇に變形したるモーゼの杖の記あるが如き、數へ來れば擧ぐるに遑あらず、これ等は何れも妄誕無稽の傳說として一笑に附して顧みざる者あるも、催眠術に於ける降神術或は幻覺錯覺を以つて說明するを得、又之れを事實に現はすこと不能のことにあらず、然り而して吾人が最も面白しと思ふは、新譯全書中耶蘇に關する數箇の傳說なり次章に其尤なる者を擧げひ。

第二章　耶蘇の行ひたる奇蹟

第一節　葡萄酒變じて血となりパン變じて肉となる

耶蘇教の信徒となるには、第一に洗禮といふ儀式を受けざるべからず、此儀式は近來は略して行ふ所あり、或は改良して行ふ所あるも本來は中々面倒なるものにて、之れを受けねば神の子となる事は出來ぬといふ、八ケましきものなり、此儀式中パンと葡萄酒を祭壇に供へて、之れが耶蘇基督の肉となり血となるべしと信ぜらる儀式なり、此の式の模樣を見るに、先づ祭壇若くは食卓を奇麗に飾り、其上にパンと葡萄酒とを供へ、司祭者はパンと葡萄酒とを取り之れを祝して神に獻げ、種々の

祈禱を爲したる後是れ我體なり」是れ我血の杯なり」願はくは主此の獻物を嘉納し給ひて、吾人の爲に主の御子耶蘇基督の御肉身御血とならしめ給へ」(彌撒典文)と祈る、而して此式に依り其のパンは肉となり葡萄酒は血と變ずとは熱烈なる舊教徒に依りて信ぜらるゝ所なり、其儀式の莊嚴は實にパンは變じて肉の味に食せられ葡萄酒は變じて血の味に飲まるゝ、此パンに就ては次の如き耶蘇の行へる奇蹟あり、約翰傳第六章に記す所左の如し、「イエスガリラヤの湖卽ちテベリアの湖を渡りて前岸の或る山に上り、弟子と偕に其處に座せり、時に猶太人は彼等大祭日たる、踰越の節に近づく折しも、耶蘇が以前病者に對して奇蹟を與へしと聞きて、多く隨ひ來れり耶蘇目を擧げて多くの人の來れるを見て、其の弟子ピリポに云ひけるは何處よりパンを買て彼等に食せしむべきか、と弟子は一人銀二百を要すべく、且此處には此多數の人に供給すべき物品なきを答へしに耶蘇此處に五千人ばかりの人を座らせ、一童子の持てる一箇のパンを取りて祈りて弟子に與へ、弟子これに座りて人々に與ふ又次に此の如くして二疋の小さき魚を人々に與へたるに不思議や一片のパンは各人をして一樣に飽き足らしめ、尙殘の粉を集めしに前には僅かに

葡萄酒血に變ず

一塊のパンが今度は其の粉十二の筐に充滿せり、人々耶蘇の行ひし奇蹟を見て此は誠に世に臨むべき預言者ならんと讚嘆せりといふ。

基督敎の一部學者は之れを以て、斯る奇蹟が實際ありしにはあらずして、之れ基督が靈の糧卽ち人々が精神內に渴望せる宗敎心の滿足に營へたるものなりと云へど、强ち之れ實際に見るべからざることには非ざるべし、殊に簡易に行はるゝ催眠術の實驗に於て蠟燭を菓子なりと云ふて與へたるに、催眠者は蠟燭を菓子の味にて食したりと云ふが如き、術者は何物をも與へずして、今汝に西洋料理を與ふと云へば催眠者は西洋料理を食したるに異ならず、味美にして滿腹す、此現象と耶蘇の行ひし前記の奇蹟は同一の現象と解するを得、人或は曰はむ耶蘇は別に催眠術を行はず、從て信者を催眠せしめしことなし、と其人は未だ催眠術とは如何なる者なるかを知らざるが故斯かる疑問起れるなり、已述の如く別に催眠の形式を行はざるも自然の睡眠の如く眠り居らざるも、暗示にはよく感應して幻覺錯覺を起すことを得るものなり、當時信者は耶蘇には絕對無限の力ありと確信したる故、自然に偶然的に催眠現象を現はしたるなり、論より證據催眠術によれば前記の現象を

自在に起すことを得ればなり。

第二節　冷水變じて葡萄酒と化す

ガリラヤのカナと呼ぶ所に婚筵あり、耶蘇其弟子と共に招かれて其席に列る、然るに此席に葡萄酒なし、然る所猶太人の例として潔の爲めに四五斗入の石甕六つ彼處に備へ付けあり、耶蘇下僕に命じて清水を甕に滿たさしめ、暫らくして汲取るに其の六個の石甕の水は何時しか變じて香味佳き葡萄酒と變し居れり。(約翰傳第二章)

フリドリヒ、オルスウゼン氏之を科學的に説明して曰く「カナの婚宴に於て水は實に葡萄酒と變化せり、然れども是れ敢て絶對なる超自然的の出來事にあらず、夫れ通常を以てすれば葡萄樹の吸入したる水液は、日光の助けを以て葡萄菓の中に葡萄酒となるものなり、耶蘇は眞に此の順序を急速ならしめて、水を變じて即席に葡萄酒に化したるのみ」と面白き觀察といふべし、然れども余の考によれば、催眠術にて水を酒の味に飲ましむると同樣の現象なりと信ず、事更に催眠法の形式を行はざるも術者を信頼せる感性の高き被術者に對しては容易に行ひ得る所なればなり。

第三節　海上を歩行し波濤を靜止す

耶蘇ガリラヤ湖邊にて弟子にパンを與へて後山に入る、日の暮るゝ頃弟子海に下りて舟に乘じてガペナウンに向ふて海を渡る、既に日暮れたれど蘇耶來らず、漸くにして暴風起り波濤狂ひ起りたれば、人々安き心なく耶蘇の身を案じつゝ一里十町ばかり漕ぎ出せる時、耶蘇海上を歩んで舟に近づき乘る、弟子且懼れ且つ喜び舟内に請じて行く程に波靜止して舟は安らかに目的地點に安着せり。(約翰傳)

人は水面上を歩行し得べきや、恐らくは之れ不可能の事なるべし然れども昔某禪僧あり禪の妙を得たるを以て聞ゆ、偶〻舟に浮んで端座禪定に入りしが、舟岩に座して轉覆したりしも彼は尚安然として水上に浮びつゝあり、之れ無念無想の境に入りて身心殆んど何の障碍なき故能く水上に浮び居たるなるべし云々、其眞僞は固より論ずる事を得ざるも、此理を以て耶蘇海上歩行の奇蹟を見れば、達人の修養

の極致或は萬が一にも此の境界に到り得られぬこともなかるべし、此解釋は科學的に見て少しく首肯に苦む所なきにあらず、然れども此現象を催眠術の幻覺を以て說明せば、實に科學的に明白に之を現はすことを得べし、故に余は幻覺說を以て穩當なりと信ずるものなり、卽ち幻覺を事實と誤信し後世に傳へしものと信ずるを至當なりと思ふ。

第四節　心力にて木を枯らす

耶蘇エルサレムの宮殿に入りて、ベタニヤに往き翌朝都城に返る時、飢ければ路の傍にある一の無花果の樹を見て其處に來りしに葉の他に何も見えざりしかば、今より後永久に果を結ぶを得ざれと云へば、無花果立ち所に枯ぬ、弟子之れを見て怪み云ひけるに、無花果の枯るゝ事如何に早きや、耶蘇彼等に云ひけるに、我まことに汝等に告げん、若し信仰ありて疑はずば此無花果に於けるが如きのみならず、此山に命じて此所より移されて海に入れよと云ふとも亦成ん、且汝等信じて祈らば求むる所悉く得べしと（馬太傳廿一章）此奇蹟は合理的解釋を求むる一部基督敎徒の

爲めに無意義なる異端の奇蹟にして、眞正に耶蘇が行ひしものにあらずとして却けられしものなるが、之れ甚だ無理なる話にて之れをして合理的解釋が出來ざるため故なく却くれば、他の奇蹟も亦同樣の運命を見ざるべからず、吾人が之を見れば、却つて他の奇蹟よりも興味ある如く思はる、又ある人は之れ耶蘇がエルサレムの都人士の歸依を受けんが爲めに人工的に化學的知識を應用して、無花果を枯らしたりと云ふも、耶蘇がかゝる小策を弄したりと云ふは餘りに大宗敎家を侮りし解釋にあらずや、又後人が耶蘇のえらきを誇らんがために附會せしものと云へば其れまでの話なれど、一說によれば耶蘇の如き宗敎家が強烈なる精神を靈動せしむれば、獨り生物に對して種々の作用を爲し得るのみならず、感覺を有せざる（神祕的にいへば植物にも感覺あるやも知るべからずと雖も、兎に角通常感覺なきものとして）植物に對しても斯る作用を爲し得ざるにもあらざるべしと、耶蘇が「若し信仰ありて疑はずば山を移して海に入らしむべし」と云へる壯大なる言大に味ふべし、强烈なる精神は何物をも動かし得べきものなればなり、然れども之れ又催眠術上の錯覺を以て說明せば容易に合理的に解釋するを得、耶蘇は必ず無花果の樹を

枯死せしめんと確信す、弟子は斯くならんと豫期し想像して疑はずに見れば、生木も枯木と錯覺を起す決して六ヶ敷事にあらざればなり、當に當時耶蘇及び弟子は共に錯覺とは心附かずして事實なりと誤認し、後世に傳はりしものにあらざるか。

第五節　死人を蘇生せしむ

耶蘇山より下りて多くの病者を治療して、人々の信仰を得て敎を說き居たるに、或人來り拜して曰く「我女既に死したり若し救世主來りて手を下し給はゞ生きもせむ、と耶蘇起ちて彼れに從ひ、其弟子と共に往く時に一女あり、十二年間血漏を患ひ居れるが、後に來りて耶蘇の衣に觸るゝ、蓋し耶蘇の衣の裾だにも觸るれば癒えんと思ひしなり、耶蘇振り返りて其婦人を見て曰く女よ心安かれ、汝の信仰汝を癒せりと、女此時より癒ゆ、さて耶蘇彼の死したる女の家に到り、死せりといふ女を見て、後泣き悲しめる多くの人々に悲しむなかれ、女は死したるにあらず只寢ねたるのみ、と人々之を聞きて哂笑ひしが、耶蘇の歸れる後試に檢するに其言の如く、死せしと思ひし女蘇生し居たり、こゝに於て耶蘇の名聲いよ〳〵世に高かりき。」（馬太傳十章）

泰西に於て一時基督敎の奇蹟が騷がしかりし頃、合理論なるもの起りて總ての奇蹟を合理的に解釋せんと試みたりしが此死者の蘇生に對しては最も苦しき解釋を與へて曰く「彼の女は眞に復活したり、然れども、彼は前に死したるにあらず、假死し居たるなり、故に復活せしも亦は奇蹟と云ふに足らず、と固より然るべし、眞に死したるものが蘇生すること無きは勿論なるも、少なくも瀕死の病人既に死せりと認めらるゝ病人を適宜に視察し、相當の手當をなして回復せしめたるは勿論にて、此現象を一寸見れば實に不思議にて大奇蹟の如くなるも、心を靜かにして考ふると合點し得らるべし、彼の小兒が倒れて足を痛めし場合に、其母親が其痛所を擦りやり乍ら、坊はえらいから泣かぬ、痛み所は無くなつた……」と言はるれば其通りに苦痛を忘れて再び飛び廻りて遊ぶものなり、其れと之れとは程度の差にて、所謂催眠上の治療に外ならざるなり、殊に余の行ひたる催眠術の實驗によるも、或病人が既に死せりとて親類故舊相集り、葬式の準備中なる死人を暫時拜借して試みたるに忽ちにして蘇生し、健全體とならしめしことありたるに於てをや。

第六節　惡鬼を追拂ふ

耶蘇海上に暴風雨を靜止してガタラ人の地に着き、船より上れる時惡鬼に憑れたる人墓場より出で來れり、此人は常に墓場を家とし屢〻桎梏と鍵とを以て繫げども、うちきり桎梏を打碎きて狂ひ廻るも、之を繫ぎ得るものなく、亦誰も之れを制し得るもの無かりき、彼は夜も晝も常に山と墓場に於て叫び暮し、又石をもて己が身を傷け居たり、然るに今耶蘇が此處を過ぎ往くを見るや、大聲に呼はつて曰く、至上の神の子イエスよ、我れ汝と何の關する所なし、我れを苦しむる勿れと云ふ、耶蘇彼れに向つて汝の名は何と問へば、レギョンなりと答ふ、而して切に我を此地より追出す勿れと希ふ、然るに耶蘇の疾く去りて人を苦しむる勿れと叱するに及んで、傍に草を食める豕の一群を見て、すべての惡鬼は我等を送りて豕に入らせよと云ふ耶蘇の許すに及んで鬼は其人より出でゝ豕に憑きたるより、約そ二千疋ほどの群劇しく馳下り崖より海に溺れ人は安全なるを得たり。

これ馬可傳第四章に記す所、何等奇怪なる傳說ぞや、今日科學的に前記の惡鬼に憑

かれたる人を見れば、一種の精神病者と見るの外なし、只其中潤色甚しきに過ぎずと信ず、精神病者を信仰治療法によりて治する決して珍らしきことにあらざるなり、只豕が海に入り溺れたりと云ふは幻覺と見ば敢て虛言として排斥するに及ばざるならむ。

第七節　雲中より神聲を發せしむ

耶蘇二三の弟子と共に人を避けて高山に登る、弟子其容貌を見るに其面日の如く輝き、其衣は白く光れり、然るに俄然一團の輝ける雲舞ひ下りて弟子に覆ひ雲中に聲あり「耶蘇は我愛子なり」と、諸弟子大に怕れ倒れ伏して頭を上げ得ず。

耶蘇彼等を撫でゝ「懼るゝ勿れ」と云ひければ各〻目を擧げて見るに唯耶蘇の外何物もなく天晴れて舊の如し、(馬太傳)

これを耶蘇變貌の奇蹟、幷に山上の奇蹟といふ、思ふに其面日の如く其衣白く光れりとは、人無き高山に於て各自の敬仰措く能はざる耶蘇を見たる時、其面日の如く其白衣は輝きて神々しく見えたるならん、彼の催眠術を行ふ時、被術者術者の容貌

を凝視して居ると、術者の面貌は變化して奇妙の狀態を表はすこと珍らしからず、其れと同樣の錯覺ならん、雲舞ひ下れり云々の事實は之れ心理學上の幻覺作用にして、耶蘇が手を觸れて懼るゝ勿れと云ふに及んで、舊に復したるは、幻覺に襲はれたる者が何等か偉大なる者に依れば、其幻覺を消し得る事は宛かも彼の幽靈其他の妖怪と稱する者を見たる時、經文呪文等を唱へて之を消し去ると同樣の原理にて、今耶蘇は彼等に取りて偉大至上の神とせらる此至上の力ありと信ぜらるゝ人に依りて「懼るゝ勿れ」と安慰さるゝ幻覺豈に消失せざるを得んや。

第八節　魚口に金を生ぜしむ

耶蘇ガラリヤを遍遊してカペナウンに來れる時、官吏耶蘇に納稅を迫る、時に耶蘇其弟子に告げて曰く「汝海に往きて釣を垂れよ、初めに釣る魚を取りて其口を開かば金一つを得べし、其れを取りて納めよ」と、さて海に往きて魚を釣るに果して金ありき。

之は彼の無花果の呪咀と共に異端の奇蹟として、耶蘇敎徒が聖典中より除き去らんとする奇蹟なり、奇蹟の多くは幻覺錯覺なり、若し然らずして客觀的の現象卽ち事實の事なりと妄信せんか、社會敎育上害ありて益なし、本節の奇蹟の如きも斯樣の夢を見た、換言すれば本節の官吏及び魚の件は幻覺なりと解さば、充分に心理的に說明するを得、當時は幻覺又は錯覺は心理上の現象なることを知らず偏に神力に依る不思議の現象とのみ信じ後世に傳はりしならんか。

第九節　藥を用ひず重病を治す

耶蘇諸國を歷遊して其聲名愈〻高く、隨つて種々の病を治したる奇蹟擧げて數ふべからず、之れ等の事は馬太傳、路加傳等に多く散見せるが、今一々之れを擧ぐる事能はざれば、馬太傳に記されたる二三を揭げ最後に簡單に其原理を考察し置くべし。

（一例）耶蘇山より下りし時、多くの人々之れに從へり、癲病の者來りて拜して云ひけるに、主もし旨に適ふ時は我を潔くなし得べきか、耶蘇手を伸べて彼等に按て我旨に適へり、潔くなれと云ひければ、癲病直ちに潔まれり。（第八章）

（二例）耶蘇カヘナウンに入りし時、百人の長たる者來り願ふて曰く、主よ我が下僕癱瘓を病み家に臥して惱めり、耶蘇曰く我れ往きて之を治すべし、百人の長たる人答へけるは、主よ我汝を我が屋根の下に入れ奉るは恐れ多し、唯一言を出し給はれ、然らば我下僕は快癒せん、其一言とは何ぞや、曰く「汝の病快癒せよ」となり、耶蘇彼が信仰の篤きを喜び其言の如くなしたるに病忽ちにして快復せり。

（三例）二人の盲目あり、耶蘇に乞ふて曰く、主よ汝我が目を開き給はれと、耶蘇曰く汝等我が此事を行ひ得ると信ずるや、答へて曰く然り、耶蘇我等の目に手を觸れて目を開けと云へば、忽ちにして眼開けぬ。

（四例）盲者の目開けるを聞きたる人々は、鬼に憑かれたる啞を連れ來りしに、鬼追出されて啞もの言へり。

（五例）或人耶蘇の所へ來り、跪いて云ひけるに、主よ我子を憐れみ給へ、癲癇にて屢〻火に倒れ、甚だ苦しめり、之を主の弟子に連れ往きたれど治することを得ざりき。耶蘇答へて曰くあゝ信なき曲れる世なるかな、されば斯る惡鬼の横行するなり、速かに、患者を我許に連れ來れ、と耶蘇遂に鬼を叱れば鬼出でゝ其の後再び發病せず。

（六例）耶蘇會堂に入りたるに、一人手枯へたる人ありけるが、耶蘇彼に向ひて爾の手を伸べよと云ひければ、彼の手忽ち伸びて尋常人の如くなれり。

（七例）耶蘇山より下る途上、其弟子等が學者に取圍まれて何事かを論ぜるを見、立寄りて故を問ふ、一人の男病める少年を伴ひたるが、答へて曰く此兒惡鬼に憑れたるため、時々倒れ伏し、齒咬みて苦しみ疲る、われ之を追出さんと主の弟子の許に連れ來りたる所、彼等諸弟子は之を能くなし能はざりき、茲に於いて學者等來りて大に主の弟子等と論ぜるなりと、耶蘇卽ち、然らば其兒を連れ來れ、我れ試みに夫れを治せん、と、父其子を耶蘇の前に置く、時に彼の兒耶蘇を見るや否や、地に仆れ轉びて沫を吹けり、耶蘇其父に問ひけるは何時頃より斯くなりしぞ、父云ひけるは少時より也、惡鬼しば〳〵之れを火の中あるひは水の中に投げ入れて殺さんとせり、汝若し爲すことを得ば我等を憐みて助けよ、耶蘇彼れに云ひけるは、汝若し信ずることを得ば信ありて何事か爲し能はざる事あらんや、其子の父直ちに聲を擧げ涙を流して云ひけるは、主よわれは御身を信ず、願はくは助け給へと衆人は二人の問答を聞きて其奇蹟を見んとて馳せ集り、學者連は結果如何と片唾を呑んで控えたり、

耶蘇大喝一聲惡鬼を叱して曰く「啞にして聾なる惡鬼よ、我汝に命ず再び之れに入る勿れ」と惡魔叫びて大に彼の兒を拘攣しめて出で去りければ、彼の兒は死したるものゝ如くなりぬ、人々之れを見て死せりと馳ぐ、耶蘇その手を取りて扶け起せば、彼は起ちて息吹き返しぬ、耶蘇家に入りしに其弟子問ひけるは、我等之れを追ひ出さんとして追ひ出す事能はざりしは何故ぞ、耶蘇彼等に云ひけるは此種の忠者は祈禱と斷食とにあらざれば逐ひ出すこと能はざる也と。

以上は馬太傳に於ける耶蘇が病人に對して爲せし奇蹟の主なるものなり、其學問上の原理は如何と云ふに、凡そ癲癇とか俗に云ふ手枯へとかの類が催眠術上の暗示にて治療し得ることは、少しく催眠心理學を研究せる者の實驗し證明する所にして、今日にては既に何人も認むる所なれば、余が今更事々しく說明するの要なかるべし、さて其の惡鬼のつきたる者とは如何なる類なりやといふに、之れ余が既に說きたる如く、之れ等は「ヒステリー」「てんかん」の類なる事は其の記されたる事實を以て明らかに知るを得べく、學問の進歩せざる智識の開けざる當時は、之れ等の病氣を病氣とは爲さずして、惡鬼の憑きたるものと爲したるなり、今日我國にても片

田舍の山間に往くと、病人出でたるときは、狐が憑きたりとか神の罰なりとか云ふ處あり、夫れと同樣ならむ、而して此種の病氣が勇壯にして意志の壯健なる人に依りて、精神に激動を與へらるれば、自ら快癒すべきやは又催眠心理學の敎ふる所なり、耶蘇が先づ「汝を信ずるや」と自己に對する相手の信不信を問ひ、「我れ主を信ず」と相手方が自己を確信せるを待ちて、始めて行ひたるを見ても知るべし、又意志弱き弟子の爲めには「祈禱と斷食とにあらざれば能はず」と言ひて神の力苦行の力を借り來りて、相手の精神に感應せしめ得べきを敎へたるを見ても、明らかに之れを知り得べし、其用意の周到なる又其方法の宜しきを得たる、今日催眠學者が治病の祕訣とする所も又之れに外ならざるなり。

耶蘇が重病を治したる原理を自力的治療法と、他力的治療法との二に區別して述べたる議論『道』と云ふ雜誌に見えたり、重複を顧みず左に其要點を抄出して示さむ。

「奇蹟的なる療法に就いて論究することゝせん、玆に十二年間、血漏を患ひ苦みつゝある婦人あり、或る時イエスが會堂の主ヤイロの請に應じ、彼が家に到らんとする

を途に擁して、イエスの衣に捫りたりしに、奇なる哉、血の出づることは直ちに止まり、且疾已に癒ぬと其身に覺えたりしと云ふ、此時イエスは彼女に告げて曰く、『女よ爾の信なんぢを救へり、安然にして往け、爾の疾癒ゆべし』と爾の信なんぢを救へりの一句自力的療法の眞義を言ひ盡して餘蘊なきものなるのみならず、此際かゝる奇効を奏したりしことを毫も己れの能力、又は神の威力に歸することなく、最も率直に明白に、些の飾り氣もなく、言ひ放ちたるイエスの心事の皓潔なるには誠に欽慕の念禁じ難きものあり、そは兎に角として、今此患者は如何にして左ばかりの難症を治癒し得べき程の信念を起せしぞ、又其信念なるものには如何なれば左程の能力あるものぞ。

憐むべき此患者は、十二ヶ年の永き間病魔の爲に苦められ、而して其間には自己の資産を擧げて悉く蕩盡し終るまで、醫療に力を盡しゝも寸效なかりしを以て、懊惱苦痛寸時も止むことなかりし際、會ゝイエスは神の子なり、彼の衣だにも障らば如何なる難症も直ちに治癒すべしとのことを聞き堅く〳〵それを信じ、一日千秋の思して、其機會の到るを待ちつゝありし折、圖らずイエスに遭ひ其目的を達したり

し其刹那の間に於て、彼の信力活動し、茲に驚くべき、奇效を奏するに至りたる也。

信念の力が如何にして乎、彼の女の疾患をば治癒せしめたりしぞ、曰く他なし、彼女の精神界に伏在してありたる確信力が機を得て活動し、彼れの肉體に變化を與へたるに依て然る而已、『精神は主にして肉體は從僕の如きもの(中略)此肉體をして猛火に燒けず、熱湯に爛せざる底の不死身とならしむれば、又反つて火なきに火傷を生じ、熱に觸れざるも腐爛せしむるのみならず、虎烈刺菌を飲んで平然たることを得れば、無病にして、頓死せしむることさへあり』斯く肉體は精神の爲に自由に變化さるゝものなるも、併しながら其變化を起すべき動力は全く確信作用に依るものなるが故に、若し一度其確信作用起らんか、肉體は、其作用の爲に如何樣にも變化さるゝものなり。

凡そ吾人の身體中には、病を防ぎ且つ病に打勝つべき自衛の妙機は自然に具備しつゝあり、而して此妙機は擧げて悉く精神なる技師に依て運轉さるゝものなるが故に、若し一朝其技師たる精神に孱弱其他の故障起らんか、直ちに其器械に影響を來たし、動力は弱く、働きは弛みて、遂に病魔の爲めに侵略され、命を損じ身を滅すに

至ること、宛かも國防の力衰頽して、外敵の爲に滅亡の難を蒙るが如きものなり、故に若し之に反して、其心力旺盛となり、自衛の妙機をして極めて敏活に働かしめなば、すべての疾病を退治し、無病强健體となり得ることは、自明の理にて毫も不思議の事にはあらざるなり。

イエスに由てなされたる治病法中に於ては、前に擧げたる如き自力的療法、即ち患者自信の信念力を以て治癒し得たるもの〻多きを占むるは、爭ふべからざる事實なるも、然しながら、患者の信念力を離れ、全然イエスの心靈力のみに依て治癒されたる他力的療法なるものも亦尠からざるべく、殊に此章の主眼たる、奇蹟的なる治病法は多く此部に屬するものたり、今其一例として、左の數節を抄錄せん。

會堂の宰ヤイロと云ふ人きたり、イエスを見て其足下に伏し、切々に求ひけるは、我いとけなき女死ぬる瀕りになりぬ、之を救はん爲に來りて、手を彼に按きたまへ、然らば女は生べし。（中略）

イエスに此事を言をるうちに、會堂の宰の家より、人々來りて曰けるは爾の女すでに死したり、何ぞ師を煩すや、イエス直に其告ぐる所の言をきゝ、會堂の宰に曰へるには、怖るゝ勿れ、たゞ信ぜよ、イエスペテロとヤコブ及びその兄弟ヨハネの外は誰にも共に往くことを許さゞりき、既に會堂の宰の家に來りて人々の忙亂いたく哭泣を見る、彼等に曰けるは、何ぞ忙亂かつ泣くや、女は死るにあらず、たゞ寢たる耳、彼等イエスを嗤笑ふ、イエス凡ての人々を出し、女の父母と、その從へる者等を率つれ女の臥したる所に入り、女の手を執りて之れに曰けるは、タリタクミ之を釋けば、女よ我汝に命ず起きよと云ふ義なり、直ちに女おきて行めり、彼は年十二歲なり云々（馬可傳第五章）

こは純然たる他力療法にして、而して其死者を蘇らしたりと云ふが如きは、奇蹟中の尤なるものと云ふべく、此蘇生の一段に就ては、余も多少の異論を存するものなるも、とにかく余は大體に於て、斯かる事柄の實際上行はれ得たりしものなるを信ずること堅く、從つて彼の唯物論者が此の如き事柄のすべてを、草昧時代の遺物たる荒唐不稽の奇蹟談なりとして排斥するが如きは、未だ事理の兩端を叩かざる淺薄卑近の說として拒否するものなり。

自己の信力に由る自力的療法の如きは、一應の說明に由つて直ちに了解され得ん

も、他力的療法、殊にイエスのなされたるが如き、奇蹟的なるものに至つては、再應反覆の説明を爲すとも容易に合點され難き難問題たり、併しながら余は此問題に向つて十分正確に解決を與へ得べき理由と、及び余自身に於て實驗し得たる例證とを握り居れるを以て、之に依て解決を下しなば、敢て左程の難事にもあらざるべく思惟するものなり。

吾人等の精神は互に相感應道交するもの、而して其感應作用が強度に行はれたるときには、茲に同化作用なるもの起り、其同化作用が尙ほ一段の強度に達したるとき、そこに靈的確信力の作用なる、一種の靈的活動力を生じて遂に對者の心身に、殆んど常規を以てしては律し難き底の、變化を起さしむるものなり。

心靈療法なるものゝ原理たるのみならず、他力的療法の一般に通じて、之が原理となり、法則となるべきもの、而して時の古今を論ぜず、洋の東西を問はず、大宗教家たり、大偉人たる人々の對人的奇蹟現象を顯はされたる所以のものも、要するに、此理法を最極度に迄應用されたるに外ならず、今茲に論ぜんと欲する、イエスの奇蹟的治病法なるものも亦、畢竟此理法の範圍を脫せざるものなるべければ、之を以て十

分説明し得べきことを、余は茲に主張せんと欲するものなり。

余は實にかゝる見解を有する者、請ふ暫らく余をして前に擧げたる實例に就き、此見解の上よりして解釋する處あらしめよ、彼のイエスはヤイロの娘已に死せりとて、人々の擾亂哭泣するを見、泰然、彼等に告げて曰く、「死ぬるに非ず寢たる耳」とイエスは實に斯く信ぜり、此信や金剛の如く、其氣宇や大魔王の如く斯の確信と、此元氣とは、聽て彼が患者の頭に手を按くと同時に、一種の原動力となりて顯はれ、常に宇宙の大靈と冥合し同化しつゝある彼れの心靈上に、偉大なる靈的確信作用を起さしむるに至れり、此偉大なる靈的確信作用は、卽時患者に感應して、宛も電流の刺激に似たる働きを生じて、殆ど能力を失ひたる患者の精神に活動力を起さしむるに至る、一と度び活動し始むれば直ちに血行をして盛ならしむ、血行盛んになると俱に身體諸機關の働きも恢復し來りて、一時失神死者の如き狀態に陷りし少女も、茲に漸く蘇るに至りたるものなるべしと思ふ、之余がイエスのなされたる起死回生の奇功に對する所存の一端にして、少しく牽强附會の嫌あるに似たるも、とにかく、靈的確信力の作用なるものには、一時失神の狀態に陷りたるものゝ如きをも、恢復

せしむるの能力ありと云ふ、余の所信は余をしてかゝる見解を附することの敢て誤りならぬを主張せしむるなり。」

以上は『道』と云ふ雜誌に見えし藤田氏の說なり、此說中前段の自力的治療の原理に就ては反對論を唱ふるもの少なかるべし、然れども後段に述べたる他力的治療の原理に就ては反對論を唱ふるもの多かるべし、何者科學的に說明し得ざることを類推論法によりて立てるものなれば、なり、去りながら後說と雖も絕對に排斥すべきものにもあらざるべし、斯學研究上大に參考とすべき一論說なりと信ず。

基督敎に於ける奇蹟を尙擧げ來れば實に數ふるに遑あらず、如上に擧げたる者を以て其全班を推知し得るを以て基督敎の奇蹟は爰に筆を止めんとす、而して基督敎の形式に屬する一派として、目下米國に於て非常に盛んなる所のクリスチャン、サイエンスにて行ふ心靈療法は名高し、よりて其事を一言述べて本篇を結ばんとす。

心靈療法（クリスチャン、サイエンス）

クリスチャン、サイエンスなる者は、一般の宗敎が其敎義信仰に信賴して立つ代りに、健全なる學理を應用して、人の身體を壯健ならしめ、人の性質を善に導き以て人類を救はんとて、一千八百六十六年、米國のエディといふ婦人が始めて創設したる所のものなり、其主義とする所を窺ふに、元來人類は各人一樣に天に在す神の如く完全ならざるべからず、而して神の力は全能也、神の智識は全智也、神の生命は永久不滅也、人は先づ神の何物たるやを能く知り、其行動のまゝを其身に爲さゝるべからず、然るに基督は神の子なり、故に吾人は基督の敎へ通りに從へば完全になるを得べしと、エディ夫人は思ふ樣、人間の身體といふものは其心の表なれば人の精神が十分深く神の全智全能に染めば、只に精神の向上發達を爲し得るのみならず、基督敎の學理を應用して身體の病氣をも治療し得べきなりと、彼の女は此の原理に基きて自己の宗派を創設したり。

エディ夫人は日本の天理敎の開祖中山ミキ女の如く無學にはあらず、獨學にてあらゆる高等の學科を修めたり、「科學と健康は經典の鍵」と呼ぶエディ夫人の著書は二十七萬も賣りたりと云ふに至つては如何に世を驚かしたるかゝ知り得らるゝ

なり、此書は實に彼の女の主義を明かにし、且つ其の派の教科書と目さるゝものにして彼の女は卷頭に宣言して曰く、「妾は一千八百六十六年、人世の神法とも云ふべき基督の學理を發見して之をクリスチャン、サイエンスと名付く、之れ實に神が妾をして長年月間の準備を爲さしめて漸やく聞くことを得せしめ給へし絶對神聖なる學理の主義と病氣治療の天啓福音也」と、以て其の抱負の大なることを知るべきなり、而して彼女が此書に結論する所實に左の如し。

凡そ宇宙間に生きとし生ける者は物質的の物か精神的の物か、何れか一方のものたらざるべからず、然るに此の宇宙は全智全能の神の無限の大御心と其表れなり、心靈は不朽の眞理にして、物質は此上もなき儚なきものなり、心靈は合理神聖の物にして物質は理に契はざる穢れ不淨のもの而已、心靈は神也、而して人類は神の子――神の寫し繪と同樣の者なり、されば心靈的の者にして物質にはあらざる也云々。

斯の如く人は心靈的實在なれば、醫者の如く病氣を治し、尙一歩高く進んで醫者の能く治療し能はざる病氣をも特獨の心靈的治療法を以て容易に治療し得ると揚言せり。

今此の派の說が果して眞理なるや否やは暫らく措き、兎に角にも歐米各國に多數の信徒を有すると云へば、多少人生に幸福利益を與ふる者なる事は言を待たず、身は纖弱なる一箇の女性にして深遠なる哲理の思索に心を傾け、堂々たる人類救濟の旗幟を飜すとは實に偉大ならずや、日本の心靈界に身を置く有髯五尺の男兒にして、未だ此の女性に及ぶ者すら出でざるは何ぞや、現今一般人士が心靈にあるものを得んと渴望せる折柄、誰が日本のエディたるか、尙之れに關しては理論及び實驗等に關して述べたき事多けれど、そは他日に讓りて今は只其大要を紹介し置くのみ。

次篇に於ては我國民には最も緣故深くして且つ珍妙奇怪なる奇蹟に富める、大宗教たる佛教の奇蹟を紹介せんとす。

第三篇　佛教の奇蹟

第一章　佛教經典の奇蹟概觀

吾人は前に基督の聖書を繙くや、神變不測の奇蹟が簇々として現出し來れるに驚きたり、而かも今や轉じて佛教の經典を手にして其の包含せる奇蹟の殆んど計り知るべからざるを見る、凡そ佛教の法門は八萬四千と稱し、經典も亦從つて五千何百卷、其の量に於て既に浩瀚なり、其内容の絶大なる、新舊二聖書を合して僅々數百頁を出でざる基督教の聖書を見て驚きし眼にては、到底窺ひ知るべからざるものあり、而して其最も發達せる所謂大乘經典中に現はれたる奇蹟を檢するに、不思議と云ふも愚か不測と云ふも愚か、其奇蹟の甚深微妙にして而かも廣大、大袈裟なるものあり、彼の阿彌陀經や觀無量壽經などに於いて世界以外の世界たる極樂世界や、地獄を忽然として地上眼前に現出せしむるが如き、華嚴經には善財と呼ぶ少年が釋迦の力によりて何億何萬とも知れぬ、無量無邊の宇宙以外の宇宙を駈け廻り

て、天上天下到る所に佛菩薩連と問答したると云ふ、而して其問題の六ヶしきと門外漢の我等には何の事やら譯分らず、或は釋迦の眉間より光を放ちて世界を照らし、大地六種に震動して觀音菩薩が出現ましますといふ、觀音普門品など、奇絶妙絶珍絶怪絶に堪へざることあり、然れども一々其現象を擧げて科學上より説明し赤裸々となすことは、偉大なる佛教に對して如何かと存じ、爰には之れを論ぜず、否之を論ぜざるも余が已に耶蘇の奇蹟を論じたる所によりて、讀者は余の説を推知せらるゝならむ、よりて教祖釋迦其の人が此世界で爲したる實際上の奇蹟と、彼の流れを汲んだる各宗各派の祖師が行ひたる奇蹟と、及び彼の教徒間に行はれつゝある儀式上の二三を章を改めて紹介する所あらんとす。

第二章　釋迦の行ひたる奇蹟

前述の如く釋迦に關する奇蹟は到底詳述することを得ざれば總かに二三を錄し置くべし。

第一節　魔女を消滅せしむ

釋迦が成佛せんが爲めに菩提樹下に座せる時、二人の魔女現はれて種々の媚を呈して釋迦の身邊を廻る、其の狀を經文に記して曰く「或は眉を擧げて語らず、或は裳をかゝげて前に進み、或は顏を低くして笑を含み、或は戀慕の情あるが如し」云々釋迦一喝すれば魔女忽ち消ゆ……と、思ふに釋迦は靑春の身を以て、浮世の愛情を捨てゝ山林樹下にて苦行す、彼も人なり一たび浮世の愛慾に思ひ到れば忽然として眼前に美麗沃艶の婦人が幻覺として現はれじならん、釋迦が大喝して消え去りしといふは、卽ち覺醒して潛在意識を喚起したるもの、所謂自己暗示を以て自己の幻覺を消え失せしめしものならん。

第二節　提婆を不動金縛となす

釋迦に提婆とは古來仲惡しきものとして一般に知らる、提婆或る時釋迦を殺さんとして鐵棒を振つて釋迦に近づきしに、釋迦の威力の爲に立すくみたりと傳ふ、之れは催眠術上の實驗によりて突然被術者の身體を止動狀態となすと同樣の現象なりと思ふ。

第三節　極樂世界を眼前に現はす

印度コハダ國にビンバシャラと呼ぶ王の后妃韋提希なる人、子の爲に幽閉されて牢獄內に在り、釋迦を牢獄內に請じて此の世界の如き穢れ多き所には最早住み飽きたれば、何卒歡樂極まりなき世界に往生させ給はれといふ、釋迦卽ち生きながら汝の欲する國土に往生せしめんと、忽ちにして其眉間より光明を放つに、光明の中に二百十億の美麗極りなき佛の淨土現出せり、韋提希之れを見て歡喜極りなし、而して又韋提喜此世に居ながら極樂に往生せん方法を問ふ、釋迦之れに敎ゆるに十六の觀法を以てす、卽ち其の十六の觀法を行へば、西方十萬億土は何人の眼前にも現出すと傳ふ、前記の眉間より光明を放ち云々は卽ち幻視ならん、催眠術にて一室に居りながら被術者に幻覺の極樂を見せしむることあるは人の能く知るところなり、其現象と同一ならむ、觀法も亦幻視なり、觀法の事は拙著『催眠宗敎論』に詳なる

を以て爰に贊せず。

第四節　六神通力を行ふ

佛教に通力といふ事あり、此の通力に六つあり、羅漢の悟を開けば之を得らるゝといふ、而して佛になれば更に其通力に妙を加へて神通力といふ、神通力の六は左の如し。

(一)天眼通　とは如何に遠方の事柄にても居ながらにして知る事を得るを云ふ、催眠術の現象中最も奇なる現象として人の嘖々する所の天眼通は卽ち其れと同一現象ならむ、彼の「肉彈」の著者櫻井大尉が旅順攻擊中、敵情を催眠術によりて見たると云ふは卽ち其類ならむ。

(二)天耳通　とは如何に隔たりたる所の聲をも明らかに之を聞くことを得るを云ふ、之れは催眠術によりて被術者の感覺を鋭敏とならしめ、一町遠くの懷中時計の音を聽き或は雜誌を距てゝ明に物を見る現象と同一なりと信ず。

(三)他心通　とは他人の心を看破ることを得るを云ふ、卽ち一種の讀心術なり、之

れも全く無念無想の狀態とならば自然に誤りなき感想浮ぶものなることは、催眠學の證明するところなり。

(四)宿命通　とは自己の運命を知る事を得るを云ふ、之れも自己催眠の理により て眞に佛と同體と云ふ精神狀態、卽ち吾人の云ふ無念無想とならば、敢て其事も絕體的不能にあらざるべし。

(五)神足通　とは如何なる場所をも自由自在に飛行する事を得るを云ふ、之れは幻覺ならざれば實際には困難ならむ。

(六)漏盡通　とは自己精神に起り來る一切の迷を去つて、精神自ら靈明となり得る通力を云ふ、卽ち無念無想となる方法にして一種の自己催眠法と見るを得んか。斯く論じ來らば佛教の六神通力も催眠現象に外ならざるを感得せられしならむ、然し讀者中或は疑問を起して云はるゝならむ、六神通力を行ふ宗教家は少しも催眠術を學ばず、催眠術の何者たるを知らず、又催眠を施しもせず、施されもせず、然るに催眠現象なりとは誣言も甚だしきにあらずや、と余は答へて曰はむ、宗教上の修養を積むで佛に近づきたる、或は佛となりたると云ふ精神狀態は、卽ち催眠術を施

されし狀態と合致するものなり、又催眠狀態は他の術者の手を借らずとも、自己の意識のみにても充分惹起し得るものなり、佛に近づきたる精神狀態となるには自己催眠法によれば實に簡易に達し得るも、宗教上の修養にて其の境に達するには、稀には偶然に容易に得らるゝものあるも稀有の例にて、隨分多年苦行を積みし結果始めて其境に達するを常とす、佛教の六神通力の如きは卽ち其れならむ、尙此六神通力の解說に就ては異說あり、其事は拙著「催眠宗教論」に述べ於けり。

第三章　佛教各宗の奇蹟

本章に於いては佛教中主として日本現在の宗派に就いて一宗より一二の奇蹟を擧げたり、宗派の開けたる順序によりて記すを至當と信ずるも、爰には開宗の順序によらず、材料を得るに從つて隨意に記せり。

第一節　木像首を動かす(臨濟宗)

彼の有名なる一休和尙は臨濟宗に屬する人なりければ、一休の奇蹟をして同宗に

屬する奇蹟として之を紹介せむ、一休和尙山城國木津川の西、薪村洲恩院に住せる時、佛師高慶なるものを召して自己の木像を作らしむ、高慶齋戒沐浴すること三七日漸くにして出來上りたるを持ち往きて和尙に奉る、時に文明十三年一月下旬一休病に臥して命旦夕に迫れり、彼は重き枕を擧げて其の木像を見て曰く「死はせぬ何處へも行かぬ此所に居る、尋ねて來るな物は言はぬぞ」と歌を詠じて木像をまねきて一休々々と云へば、木像は三度までうなづきしと云ふ。

此の現象は佛師が丹精を籠めたる作なると、一休は又自己の遺像なる第二の我れと確信し、互に精神感通してこゝに至れるものなるべしと解する者あるも、余の考にては木像が動きたるにあらざるも、一休の目には木像が動きたりとの錯覺を起せしものならむと信ず、古來世人の噴々する處の左甚五郎の彫刻せし木像が動きしと云ふも、同一の現象ならむ。

第二節　刀及段々に壞る(日蓮宗)

觀音經に「刀及段々壞」といふ文あり、卽ち觀音經を唱ふれば惡人の爲に害を加へら

れんとするも、其經の功德により刀も及も段々に折れて一絲の傷だも受けずと云ふ、日蓮は日蓮宗を弘めんために諸宗を誹謗せりといふ廉により、鎌倉龍の口にて依智三郎直重と云ふもの太刀を拔き放して日蓮の首を地に落さんとする一瞬間に、天地俄かに震動して其太刀三段に折れて飛べりと云ふ著名の奇蹟あり、之れが虛實に關して先年重野博士と日蓮宗の田中智學師との間に大爭論ありたる處にして、某氏曰く歷史上眞に之れありとして、何故に刀が折れたりや學問の上より考ふれば日蓮の如き意志の鞏固なる精神の雄大なる人が、今や我が死に迫る間一髮に此事を能く爲し得たりと信ずるの外なしと、余之を虛心平氣に考ふれば、事實を誇大に傳へたる點もなきにあらずやと思ふ、日蓮今斬首せられんとするに際し自若として少しも動せざるに、列席の役人一同膽を奪はれ、日頃日蓮の奇行を信ぜる結果、終に刀及は段々に壞はれたりとの錯覺を起したるならむか、學者の研究を望む所なり。

尙有益なる日蓮宗の奇蹟を述べん、日蓮久しく故郷を離れて自宗を弘布しけるが、或る年故郷に其母を尋ねたり、然るに意外にも久しく訪れざる我家は、今や多くの

人々立騷ぎて鍼よ藥よと其模樣尋常ならねば、何事にやと尋ぬるに、御母上此程より病氣なりしが今朝來急に樣子變りて、今や息絕え給ひぬと云ふ、日蓮驚き悲しむ事限りなく、立寄りて題目を書き擔端の松に懸け經文を唱へて、病卽滅の文に至り行して、死するもの多し、然るに日蓮が死去せし母を蘇みがへらせし奇蹟を傳へ聞きて、此惡疫を拂ひ除き給はれと願ふ、日蓮白布に「南無妙法蓮華經」の七字の題目を書き、其端を舟の艫に結び、之れを海に流し曳て漕ぎめぐらし、又小湊近き興津村の井戸の中に同じく題目を記したる護符を書きたる石を沈め、其の水を諸人に飲まするに疫病忽ち退散して、萬人の喜び云はん方なし、今其の井戸の邊に寺を建て、嚴長山釋迦寺と稱すと。

之れを科學の上より觀察すれば、日蓮の母は死せる如き狀態となり居りたるに、最愛の我子たる日蓮來りて言葉をかけし故喜びの餘り病苦を忘れて起き談話したるなるべし、其他惡疫を拂ひたる方法は日蓮自身の考にては、斯くすれば必ず惡疫を除き得と確信し、惡疫を除きて貰ふ者は、日蓮上人に斯くして貰へば必ず惡疫を

免ると確信して、疑はざる故其確信通りの結果を得たるらむ、換言すれば自己暗示の結果なり、惡疫を除きたりと云ふ方法は自己暗示を强めたる手段に外ならずと思ふ。

第三節　鰯の頭靈驗を顯はす(眞言宗)

世に鰯の頭も信心からといふ諺あり、此諺の起原は彼のお竹大日如來といふ名高き本尊ある某寺の緣起に詳なり、卽ち或所にお竹と呼ぶ下女ありて頻りに大日樣を信仰し、他人の家に居りながら臺所の隅に大日如來を安置して日々信仰し居りたるを、朋輩が笑ふてお竹の留守中に其の大日如來を引ずり出し其の代りに鰯の頭を入れ置きたり、お竹はそれとは知らずして歸ると直ぐに例の如く手を合せて一生懸命に祈り居るを、彼の朋輩が可笑しさを堪へて隙見して居ると、お竹が高聲に經文を唱ふる一刹那、不思議や其の鰯の頭より赫々たる光明を發したりと云ふ、傳說によりて彼の諺は出でたるなりといふ。

斯る傳說ある以上は必ず何等かの事實ありたるならむ、苟くも其の對象の何たるを問はず、一心に祈りさへせば必ず靈驗あるものなり、靈驗は吾人の所謂自己暗示の結果なるを以てなり、其の鰯の頭より赫々たる光明發したりといふは幻覺なるべし、彼の福神と稱する惠比壽大黑の土像を造りて賣る人あり、余の知人は其の福神を買ひて家內に祭り、朝夕祈禱を怠らざりしに全く福を授けられたり、其事を傳へ聞き其福神を祭る家多し、由りて余は一日或序に其福神を製造する家を尋ねて見たるに、福神製造所は小兒の糞尿所々に散亂して、小兒は饑に泣き妻君は汚れし褌一枚のみ纏ひ、亭主は襤褸の襦袢一枚のみにて居り、今や亭主は拳を擧げて妻君を毆打するところなりき、福神の本家本元の樣子判明せり、其れをよく含味すれば眞理其中に含めることを了解するなるべし。

尙一つ此宗に於ける面白き奇蹟を擧げん、眞言宗の阿字本不生といふ事あり、之れ眞言哲學の骨髓と稱するものにして、虛空が一切萬象を包むが如く、阿字は一切を包含すといひ、元よりその眞義如何は詳細に知るを得ざれども『阿字功能抄』なる書に阿字の功能を記して曰く、道路を步み衆人の爲に其體度精神散亂する時は別段何等の異議を調へず共阿字を五六遍唱ふれば身も心も靜まるべしといふ、又大

日經には世の中に於て種々の苦しみを受くる事ありとも、靜かに此阿字を觀ずれば其の苦を免がる事を得べしと云へり、思ふに吾人が或何等かの一事に心を停止し聯想作用を止め居れば終には其注意し居る事をも忘れ全く無念無想となる、彼の催眠法にて呼吸を算せしめたり、凝視球を見詰めさしたりするは夫れによりて目や呼吸を勞らすにあらずして、其れによりて心を一點に集めしめ、精神を無想に導くなり、此理に基き頭痛したり、或は精神がむしやくしやするとき、瞑目して數息觀を行へば忽ちにして頭腦冷かとなり、精神は靜かとなる、阿字功能の原理も之れと一致すと信ず、其の觀法に曰く、行者阿字觀を修せんと思はゞ、先づ八葉の白蓮華の其の大さ一吋(一尺六寸)なるを描くべし、次に其蓮臺に月輪を描き、月輪の中に黃字の「阿」字を書きつけたりと思へ」云々(阿字功能抄)面白き觀法といふべし。

序に所謂眞言の功德に就て少しく述べん、眞言には六ヶ敬呪文あり、其呪文は諸佛の持し給へる有り難き言葉にて、其れを誦すれば種々の功德ありて奇蹟を現はし得ると云ふ、昔京都に觀勝寺の大圓房の上人寶篋と云ふ人、此の眞言の功德を行ひ種々の奇蹟を行ひたりとは佛書に傳ふる所なり、眞言は梵語にてサンスクリット

と云ふ、眞言の呪文に陀羅尼と云ふは名高し、眞言陀羅尼の經文は拙著「家庭禁厭術」に載せあるを以て爰には之を略し、左に之れに關せる二三の奇蹟談を記さん。

千手陀羅尼疫病を治したり、即ち千手觀音の眞言なり、昔弘安元年、關東に疫病非常に流行したる事ありて病死するもの其の數を知らず、然るに或る寺院に十一歳になる可愛らしき小姓ありて、此疫病に罹りたるを、其の寺の僧侶之れを憐れみ、四五人にて千手陀羅尼を二十一返ばかり繰り返して唱へけるに、其の小姓サメ〳〵と泣き出し、我れは疫神なるが、今此の千手觀音の御力に依りて、此の寺より追拂はれ申すとて打倒れけるが遂に病氣平癒したりと云ふ。

又奈良に靈病(神經病の一種なるべし)を病みたる者あり此の陀羅尼の功德に依り、刀の樣なる物を吐き出したりと砂石集に記せり。

實相上人子宮病を治したり、即ち京都白川の一婦人の腹中に大なる手鞠の如き魂を生じ、冷へて痛みけるが、餘りに痛む所より遂に物狂はしくなりけるを親類共歎きて、當時實相房上人と云へる名高き僧に診察を乞ひしに、上人曰く、之れ呪詛か靈病ならん、そは何れにもせよ、先づ護摩を修して治し參らせんとて、杉の葉を燃やし

塩木を造り、腹中を暖め、一生懸命に眞言を誦しける程に、彼の堅き物法師の手に撫でられて漸やくにして跡方もなく消え失せけりと。

前顯の疫病は狐憑病の類ならむ、千手陀羅尼の唱へにより病人の心機一轉して治したるならむ、此現象は催眠術によりて重き狐憑病を忽然暗示によりて治したると同一理ならむ。

次の靈病を治したりとの項に、刀の樣の物を吐き出したり云々は、水を吐出する有樣を遠くより見て、刀の樣な物を吐出したりと錯覺したる物か、左なくば斯る幻覺を見たるなるべし

最後の子宮病を治したる有樣は實によく、催眠術治癒法に合致せり、護摩を修すれば、法師は病を治し得と確信し、病人は法師の護摩によりて必ず病氣は除かるゝと豫期したる故、病氣は治したるなり、代言すれば病人の自己暗示と法師の精神の感通とに依りて治したるならむ、冷へたる腹を火にて暖め、下腹部の魂を手にて撫でて消滅せしめたるは、生理作用を應用したるなり、今日の進歩したる催眠術治療法も又生理及び心理の兩方面よりするに外ならず、依りて其原理に於ては異なる所を見ず。

無住法師と云ふ德川時代の高僧が、眞言の功德を解釋して曰く「譬へば弱き幻術師が現ずる幻をも、强き幻術師が是を失ふが如し」と云へり、實に然り、病氣は一種の幻の如きものなれども、此の幻を治する幻、卽ち弱き精神は强き精神に打勝たるゝなり、病身と云ふ精神は健體に壓倒されて初めて治病の效果あるなり。

第四節　空間に彌陀佛の像を現はす(眞宗)

德川時代に御藏門徒といふ眞宗の一派あり、實は眞宗正統の敎理を受けたるものにあらざるも、其の末派の僧侶と信徒との一團が社を結んで一種の新派を立てんと欲し、倉の中に入りて念佛を唱ふれば、彌陀の本體を拜する事を得と稱して廣く世に行はれたるが、遂に幕府のために嚴禁されたり、近頃之れに類するものにて「不言講」とて眞宗の一派と稱して矢張り薄暗き所に信徒を入れ、一心に念佛さして彌陀の本體を拜さしむるといふ、これは余が先年播州にありし時實驗したる所にて、信徒の眼に幻覺の彌陀佛の本體を拜せしむるなり、之れに依つて是れを見れば、此

の御藏門徒と稱するものも幻覺なることを知らず、靈驗によりて彌陀佛現るゝなりと誤信して行ふたるならむ、元來土藏の中は薄暗くして神經を沈鬱せしめ、一種の病的現象卽ち幻覺を起さしむるに極めて好都合の場所たるなり、其理は催眠術を行ふ場所として幽靜なる薄暗き室を選ぶと其理一なり。

第五節　飛行自在の通力を示す(修驗道)

役行者は大和國葛城山に入り巖居する事三十年、常に藤葛を以て衣とし松菓を食とし、孔雀明王の神呪を唱へて練行久しくして遂に飛行自在の通力を得、あらゆる日本の高山靈區を修行し廻り、終に高麗國に飛び去ると傳へらる、後世神變大菩薩と謚せられ、修驗道の祖として尊ばる、孔雀明王の神呪とは「ノーマクサーマンダセンダンマーカランケンソワカ」といふ、其の如何なる意味なるやは不明なり思ふに巍峩たる山巓の中に苦行修練して心身を清淨にし、心膽を練りたる結果飛行自在の通力を得たりとの幻覺を見たるならむ、其幻覺卽ち夢を見し樣なる現象を夫れと知らずして孔雀明王を信ぜし結果、事實と誤信し後世に傳はりし者に非ざるか。

第六節　奇々妙々の事を行ふ(天台宗)

天台宗の相應和尙、淸和天皇の貞觀元年大願を起して三年間粒米を口にせず、金峯山に登りて蕨の類を食ひて奇法を發明したりと傳ふ、其の觀法は『北嶺行明記』に見ゆ、要に曰く、

「凡そ行門は一身を山岳に委し、三密を雪領に凝らし、普く三塔九院の靈刹を巡禮し、七社和光の神祠を拜し、檜板の笠に雨露を凌ぎ、草鞋の履、常に巖石を經て疲勞を憚らず、寒暑を避けず穩刧累德其の三根を分ち、積で五百日に至るものは白帶行者と稱す、これ下根の滿なり、其中根は七百日に至り阿左羅明王の室に入り、粒を絕ち氣を屏ぢ念誦九ヶ日一浴叉の呪滿ず、是れを行滿と稱す、初百日より葛川の深山に入り、七日四種三昧を行じ、一浴叉の呪を滿じて、三時の讀經、二會の祕法是を入峯と名く、亦瀧詣と名く、此會四十二度を成就と成す、亦上表と名く、末代の根機此に止まる、洛中洛外の神社佛閣を巡禮して都合一千日なるを最上大滿の行者となす云々」

以て其の行法の一般を知るに足るべく、彼等は確き信仰を以て此の苦行を爲し其

の結果として奇々妙々の行爲を行ひ得たるなり、其現象は上來暫く述べたる自己暗示による幻覺錯覺の理に由て説明し得らると思ふ。

第七節　密呪にて蛙聲を止む(淨土宗)

呑龍上人は上野國新田郡太田町大光院の開山なり、或る時其居室の傍に小池あり蛙多く住みて其聲騒がしくして禪觀に障りあるにより、之れを去らしめんとて、密呪を行ひしに、忽にして蛙聲止まり今日に至るも其池に限りて蛙聲を聞かずと、又或る時路に一人の山伏の如き異相の者ありて念佛を授けられんことを請ふ、上人これ必ず雷公ならんとて、名號を書き其の兩傍に「震法雷、耀法雷、以法音、覺世間」と云ふ文を添えて與へ、又別に其の如く記して寺に遺せるを、今日に至りて尙其れを印行して除雷の名號とて靈驗高く今日にても希望者多く、毎年舊曆の八月七八九の三日呑龍忌を行ひ、末寺三十餘ヶ寺の僧來會し頗る盛なりといふ、呑龍上人は殺生禁斷の場所を犯せし罪人を隱匿して、幕府に罪せられしとあると云ふ、中々奇才ある僧なれば、斯かる奇法を行ひて世人の歸依を受け自己の敎法弘道の助けとなせしものならん。

前記の密呪によりて蛙聲を止めたりと云ふは信か、若し信なりとせば呑龍上人の精神が群蛙に感應したるなり、精神學者が思念によりて鳥雀或は蟲類を意の儘に或は止まらしめ、或は舞はしむと云ふ現象と其原理は同一ならむ、而して寺に遺せし名號を印刷して、雷除の札として、靈驗ありと云ふは、其札を貼り置けば雷災を免れ得との安心を得る唯一の方便となりしなり、多くの神佛の守札は此の理によりて説明するを得と信ず、彼の盜賊除の守札を出す神社の賽錢箱を嚴重なる鎖をかけ置くを以て知るべし、眞に幾萬人と云ふ信徒の盜賊を防ぐの力あらば、神自身の金錢は盜賊の危きを免れ得べき筈なり、然るに盜賊の恐れ甚だしとて嚴重なる鎖を造り置くにも拘はらず、暫く窃取せらるゝとありと云ふを以て知るべし、而し迷信强き盜賊は其守札を見て或は恐れを抱きて盜賊行爲を中止するやも知れずと雖も、無神主義の盜賊に對しては何等の效なからむ。

又淨土宗に名高き奇蹟として噴々する所の中將姫が一夜に大曼陀羅を織りたるとの噂を次に述べん、爰に云ふ曼陀羅は極樂淨土の繪圖にして、中々精美なるもの

なり、世に名高き大和の當麻寺中將姫の曼陀羅といふは、中將姫が一夜のうちに織りなせしと傳ふるものなり、中將姫が大和の長谷寺に佛教尊信の餘り、蓮の糸にて曼陀羅を織らんと志し、十九歳の或一夜之れを織り始む、然るに其夜阿彌陀佛老尼と化して中將姫を手傳ひ、一夜の中に一丈五尺の大曼陀羅を織り出し、翌朝諸人之を拜するに美麗莊嚴にして目も當てられんばかりなりしとぞ、阿彌陀佛の手傳とは之れ信念の力凝りて斯る幻覺を起したるものならむか、或は人格變換して中將姫と阿彌陀佛と云ふ二個の人格同時に現はれたる狀態ならむか、(人格變換の事は拙著プランセット術に詳し)大信仰によりて得たる力はよく一夜に斯る大事業を織弱なる女子の手に成し遂げしめしものならむ、火事の場合に病人が大荷物を抱へ出せり、後火事止みて其荷物を大力の男四人にて漸く荷ひ入れたり、幾ら火事の場合とは云へよくも病人が一人にて彼の大荷物を抱へ出せるものよ、精神統一の力の大なる實に驚くべきものなり、中將姫の奇蹟も之れと同一理由によるならむ。

第八節　毘沙門天の木像動く(時宗)

尾張國甚目寺は推古天皇の御宇、蒼海の底より觀音の像を得て寺院を建立したるものにて、其の本尊の毘沙門天は古來靈驗無双なりと稱せらる、時宗の開祖一遍上人こゝに來りて、寺僧の請に應じて七日間佛事を行ひしに、元來貧寺なりしと見えて、六日目に至りて諸人に供養する食物盡きて如何ともし難し、時に一遍上人寺僧の歎を聞きて曰く「經に佛法の味を喜んで禪三昧を食とす」と云へり、信心厚ければ食物の乏しきは意とするに足らず、意を安んじて我と共に七日滿願の日を待つべしと、相變らず修法に餘念なし、然るに其夜諸人一時に同樣の夢を見たり、即ち本堂の毘沙門天の木像動きて諸人に告げて曰く「汝等決して悲む勿れ、我汝等に食を與へん」と夢醒めて諸人等しく滿腹を感ぜりといふ。

此現象は催眠術によりて催眠術者が被術者に向ひ、今汝に西洋料理をやると云へば、其實何物をも與へざるに、被術者は西洋料理を貰ひて食したると同樣に、味美にして腹滿つ、其れと同樣の心理的狀態にして、只前顯の場合には自己暗示によりて生じたる幻覺と見ることを得、唯爰に一つ奇なるは諸人一樣に同樣の夢を見たりと云ふにあり、然し之れとても諸人一樣に同一の自己暗示を爲し同一の結果を得

たるものと見ば敢て説明し得ざる現象にあらず。

第九節　幽靈の出沒(曹洞宗)

爰に今觀音の效驗により幽靈を退散せしめたる奇蹟を述べん、觀音を曹洞宗中に屬せしめたるは聊か不穩當なれど、現今所謂觀音講と稱する者が多く同宗の信徒間に結ばれ、且つ觀音經は同宗にて用ゐらるゝと聞きたるまゝ之れを同宗に屬せしめたり。

觀音は佛敎の諸菩薩中特に人類に緣故深く靈驗高き菩薩として信ぜられ其の奇蹟頗る多し、有名なる政治家白川樂翁の著せる『花月草紙』に次の如き話あり、或る大名の屋敷に田舍からポット出の女中の奉公せるあり、當時の大名屋敷抔へ奉公すると古參の者が澤山居つて隨分威張り散らしたものなり、然し爰が心棒の仕處と思ふて辛抱し居たり、ある日古參の女中達が言ひ合せて、何んとかして彼の女中を苦しめて遣らんと妙な茶番を始めたり、其の狂言は如何なる仕掛けなりしやといふに、幽靈を拵らへてそれで驚かせて氣絕でもさせんといふのでありし、さて一人

の古參の女中が其の新參者を呼びつけて、お上の御用だから今から使に往けといふ、東京で云へば小石川から淺草までもあらうと云ふ所にて、此方はチャンと時間を計つて置き、今から往けば暮れて後歸る事になる、而かも其の日は天氣が惡く、夕方になつては如何にも寂寥たる頃となりたり、下女は斯る事とは知らずして御主人の御使なればと、一生懸命になつて先方へ參つて用を濟ませて歸ると、裏門とか通用門とか云ふ樣な所を是非通らねばならず、其處には堀があつて水の流れに橋が架せられたり、其の邊に垂柳があつて如何にも幽靈でも出そうな所なり、所が女中の一人が妾が幽靈になつて遣らうと云ふので、柳の下で待ち受けて居ると、新參の女中は斯る事とは露知らず、今歸つて其の橋を渡らんとする刹那、柳の下でサワサワと音がして、白き衣服を着た者が、黑い眼をむき青白き顏をニョイと出して其凄き事云はん方なし、大抵の者ならば膽を潰す所ならんも、彼の女はジロリと其幽靈を見たるまゝにて行き過ぎて了ひ、遂に言ひ附けたる女中の前へ往きて立派に御用の復命をなし、顏色更に變れる模樣もなし、發頭人の老母先生不思議に思ひ、此女は途が違つたか、折角の仕掛けた仕事が無駄になりたり、或は近眼にて幽靈を見

そこなひしかと、其方は何處を通つたと問へば、ハイ橋を渡りましてと云ふ、何か途中で怪しい物でも見ざりしや、左樣でムいます、彼の橋の所柳の下に丁度繪に書きましたる幽靈の樣なものを見たり、と平氣にて云ふより、一體お前は恐ろしいと云ふ事を知らざるか、全體幽靈は怖ろしくなきやと云へば、其の女は膝立て直して、云ふに、妾は當御屋敷へ奉公に上りまするに就て、妾の母が言ひ聞かせたる事あり、それは妾が幼少の時より實に臆病者にて夜分などは一寸も外へ出る事の出來ん位の臆病なりしが、母は之れを案じ、お前はこれから御奉公に上れば如何に恐ろしい事があらんとも、大切に御用を勤めざるべからず、然るに今までの如き臆病にてはトテも御用は勤まらず、就いては此の母が是れ迄大切にして肌身離さぬ觀音樣の御守あり、之れをお前に遣はす故、之れさへ肌に付けて置けば、例へ何の樣な事ありても怖ろしからず、といろ〳〵實驗上の話を聞かされたれば、私は深く之れを信仰し居れば今まで何の怖ろしき事もあらざりし、されば今日は幽靈出でたれど、世の中に幽靈あれば神佛もありと思へば、何れ觀音樣が退散さして下さる事と其儘後を見ずして歸りましたと云へりとぞ。

幽靈の出沒

這は心靈研究者には實に興味深き話ならずや、げにや彼の女の臆病は觀音といふ對象に依つて臆病を治すべく母より暗示を與へられたるなり、此の暗示は遂に成功して此の結果を見るに至りたるを忘るべからず、之れ卽ち廣義に於ける催眠現象なり、彼の女は母より貰ひし觀音の守札によりて、臆病消え失せて大膽となれりと確信して疑はざりし故、遂に其確信通りの結果を得たるなり、觀音の守札は確信を得る一の方便に外ならず、諸種の守札は皆之れと同樣の效果ある事を科學上より認むることを得。

次に觀音の靈驗により陣中を無事ならしめたる奇蹟を紹介せん、今より凡そ四十年前彼の長州征伐の折柄なりしといふ、其の頃上野に慧澄律師といふ高德の僧あり、此の僧當時旗本の歸依を受け非常に尊信されたりしが、或る旗本の一人が兜の八萬座へ一寸八分の觀音樣を安置して出陣せんとし、慧澄律師に開眼（かいげん）を賴みたり（開眼とは魂を入れる事）然るに律師之れを見て云ふ樣、これは〳〵結構なる尊像なり、全體此御像を造つて兜の中に納めたと云ふに就て、貴殿の精神を一つ聞かずば折角の開眼も其功を奏せざる事なれば、兎に角其志を述べられよといふ、其旗本の

精神は實は觀音の功德に依つて戰場の危難を免れんと云ふ心なりしも、若しも事實を云はゞ卑劣心を笑はれんと氣支ひ、唯佛法信仰の上より觀音樣の御像を兜の中へ納めた丈の事なれば、何卒之れに就いて敎を願ひたしと云ふ、慧澄律師曰く、抑も觀音と云ふ方は慈悲心を以て體としたれば、觀世音菩薩とは慈悲の佛といふことなり、慈悲が觀音の體とするならば、貴殿の心が慈悲でなくば觀音と一致する事は出來得べからず、若し貴殿の心が慈悲にあらずんば百萬の觀音樣を戴くとも眞個の御利益は得べきにあらじ、大方貴殿の考へでは、觀音經にある樣に、「刀及段々壞」として、向ふから及を振つて來ても、觀音の功德に依つて及は段々に折れて了ふ樣の靈驗を得んとの考へなるべし、なる程斯る利益もあらん、さりながら御身の心掛の如何に依りては、其の利益も受け得られざるなり、其の心懸とは何ぞや、卽ち今此の兜を被つて戰爭に出る以上は、君の爲め國の爲めには生きて再び家に歸らじ、吾れは君の爲め國の爲め立派に戰場に打死せん、と云ふ心ありて始めて觀音の慈悲と合體し利益を受くる事を得べしと、旗本はなる程然らんと非常に感心して、さらば仰の通りに必ず其の精神を以て尊像を兜に安置せんと答へしにより、慧澄律師は

懇ろに呪文を誦して開眼されたり、さて出陣して各所に轉戰したりしが、律師の敎訓肝に銘じ居れば、萬難を厭はず死を見る事歸するが如く、幸ひにして鐵砲も當らず、怪我もせず又打死もせず、首尾よく無事に歸る事を得たりと云ふ、これは近世の大德淨土宗の故福田行誡師が見聞したる事なりとて、親しく語られたる由を傳へ聞けり、以て神佛の靈驗は自己暗示の結果に外ならざる事を知るべきなり、唯普通の事にては自己暗示を强ひると六ヶ敷きも、觀音樣と云ふ權威ある對象物により て必ず豫期せる結果を得べしと確信し、行動する故其の豫期通りの結果を得る也。

又次に觀音の功德に依りて盲目の目を開かしめたる奇蹟の顚末を紹介せん、昔大和國高市郡の壺阪寺の附近に澤市と呼ぶ座頭あり、生れ付きの盲目なりしが、女房のお里といふは世にも稀なる貞女にて、如何にかして夫の眼病を平癒させんと、其の壺阪の觀音に祈願を籠め、三年間日參したりしが些の效驗なかりければ、澤市世を果敢なみて遂に觀音堂に參籠せる一夜、深き谷間に投身せり、女房お里は間もなく之れを發見して大に悲しみ、谷間に下りて介抱したる所、漸く息を吹返し、それと同時に今までの盲目は變じて兩眼明らかなる者となり、御禮の爲め諸國を順廻し

たりといふ、これ世に歌ふ所の淨瑠璃壺阪靈驗記に見えたり、之れ元より淨瑠璃のことなるを以て針小棒大或は無根の事なるやも知れずと雖も、若し之れが事實にして假りに座頭澤市が不治の盲目にあらずして、一時の眼病なりしとせば、其の眼病は斯る場合に或る精神狀態の變化により、平癒すべき事なしとも言ひ難かるべし、眼病の性質及び患者の精神狀態の如何に依りては絶對的不能の事にもあらざるべし、現に催眠術の療法によりて盲目の目を開かしめたる事も往々見聞する所なればなり。

尙次に觀音の功驗によりて雷を除けたる奇蹟を紹介せむ、古來雷除けとなるべき觀音經の文として世に傳ふるものあり、曰く「雲雷空生電、降雹樹大雨、念彼觀音力、應時得消散」と這は元より其儘信ずるに足らざるも之れを精神作用上より研究すれば一應の理なしとせず、之れ觀音なる對象を深く心に念ずれば、これが爲めに意識の焦點は充たされて、他の恐怖の意識は排除せらるゝが如き狀態となる、こゝを以て自ら電雷が消失したる如く平氣で道を行き、又安心して家に居る事を得、隨つて此文を一心に唱へれば之れに依りて以て必ず雷を除け得らると確信し、安心して居ることを得る大利益あり。

第十節　引導を行ふ（黃檗宗）

引導は佛敎各宗共葬式の際には行へど、之れを黃檗宗としたるは此引導を始めて行ひたる希運禪師が同宗に屬したる人と思へばなり、引導は人のよく知る如く死者を葬所に送る時に當つて、大喝一聲するものなり、此の法を行ふて弔ふ時は、死者は迷を離れて樂處に轉ずると信ずるなり。

黃檗宗の希運禪師は支那の人にして、禪師幼時より出家して久しく江西にあり、其母禪師を慕ふて日夜號泣し、遂に盲目となり常に雲水の僧を宿泊せしめ、自ら誓つて其の足を洗ふ、蓋し禪師の足に瘤あり、之を探りて若し我子が歸り來らば、之れを以て證となさんと欲してなり、廿年を經て禪師偶〻母の門邊を過ぐる、而かも其恩愛に迷執せられん事を慮りて瘤なき足を二度洗はしめ、故らに其の子たるを告げずして去る、途に舊知に逢ひたれば舊知母に禪師を見たる事を語る、其の母狂喜して禪師の跡を追ひ、福清の渡船場にて遂に水中に沈沒したり、禪師時に舟中にあり、

其の己を呼ぶ聲に驚き、急に炬火を投ずれば、其の母已に溺死せり、禪師則ち大音聲をなして曰く、一死出家すれば九族天に生ずと、若し生ぜずんば諸佛の妄語なりと、此の傳說に依りて葬式を修するには必らず此式を用ふるなりといふ、母子多年相逢はずして漸やく相見たるも、斯の如くして母は水中に溺死せり、禪師の心中思ふべし、火筴中に死者其の姿を現して天に生ずと云ふは、禪師の胸中に熱烈なる精神凝りて其幻覺を起したるならむか。

第十一節　坐禪を行ふ(禪宗)

禪宗の坐禪は名高きものにして、禪宗と云へば坐禪を行ふ宗教なりと聯想する位なり、坐禪の事に就ては余は曩きに「坐禪獨修法」と云ふ書を著はし同書中に詳述せり、而し爰に坐禪の事に關して大略を次に述べん。

坐禪とは如何なる者なるかと云ふに、禪とは梵語チャナの音譯で靜かに心を沈むるの意なり、坐は俗に云ふスワルなり、換言すれば坐禪とは坐して心を靜むるなり。

坐禪を行ふ

坐禪を行ふ仕度としては左の諸法あり。

一、坐禪を行ふときは何れの時にても可なるも、早朝と夕方とを最もよしとす。

二、朝は起床後冷水摩擦を行ひ全身を清め、空氣の清潔なる庭園にて暫時深呼吸をなすべし。

三、食後一時間の後に行ふべし、空腹と滿腹とは共に惡し、入浴の後又は輕く運動をなしたる後を最もよしとす。

四、室は靜かにして薄暗くするをよしとす。

五、座蒲團を整へ置くべし、座蒲團は厚く柔かくして其徑一尺二寸圓三尺六寸の圓形を式法とするも、有合の者を折重ねて用ゆるもよし、只臀部に充つる丈故餘り廣きは不便なり。

六、衣は寒暖宜しきに適する者を用ひ、寒中と雖も足袋は穿つべからず。

七、線香を直立に立て火を點し置くべし。

普通以上の七つを以て坐禪實行の準備とす、之を略評せんに一、二、三の冷水摩擦の事、及食後一時間を經過せし後にせよ、滿腹或は空腹を忌むと云ふは一般の衛生法

として人の常に知る所、四、五、六は自己催眠の準備として見ることを得、薄暗き靜かな室は精神を靜めやすし、香を焚くは嗅覺催眠法を行ふと見るを得、之を要するに一般の衛生を守りつゝ自己催眠を行ふに異らず、去り乍ら自己催眠と大に異る所一點あり、催眠は寢るなり腰をかくるなり立つなり坐するなり、被術者適宜の地位を執りて可なるも、禪には一定の端坐法なるものあり、決して犯すべからず、之れ特別に座蒲團の用ある所以なり、又兩手、舌及眼の如きも一定の地位を保たしむるも催眠術には之れにつき何等の制限なし、只被術者の精神をして安眠ならしむる態度なれば、其如何を問はず、之れ大に兩者の異る所とす、今左に其端坐法を略述せん、實行の準備全く調はゞ、徐ろに靜室に於て香を焚く、線香なれば香爐の中央に眞直に一本を立て、少しにても傾きては不可なり、線香なれば三個に火を點じ、而して後靜かに座蒲團の中央に坐す、其坐法に二あり、一は半跏趺坐と云ひ、他を結跏趺坐と云ふ、尙ほ吉祥坐、降魔坐等ありて各其坐法を異にす、然し乍ら斯くの如き舊式に拘泥する必要を認めず、結跏趺坐は右の足を左の脛の上に載せ、更に左の足を右の脛の上に置き、兩足を相交叉するなり、之れに反して半跏趺坐は單に左の足を右の脛の上に置くのみなり。

坐禪を行ふ

此二法中何れにても好む處によるべきも、素人に行ひ易きは半跏趺坐なり、而し俗に角力の常に行ふ所の胡坐は坐相を調ふことを得ず、身體亂れ正身端坐の位に反す、故に苟も斯る眞似をなすべからず、以下に行ひ易き所の半跏趺坐調身の法を詳述せん。

先づ半跏趺坐は左足を右の脛の上に置き、而して寬やかに衣の裾を掩ふて脚頭の露出せざる樣に整ふべし、次に右の掌を仰けて臍の前坐の上に置き、更に左の掌を仰けて其上に重ね置き、拇指と拇指とを相對す之を定印と云ふ、次に耳と肩と同位地に保ち首を眞直にして少しも左右前後に傾けず、鼻と臍とを上下一直線となし、身體を俯仰することなからしむ、斯くすれば脊骨自然に眞直にして、卽ち正身端坐の相となる、若し脊骨屈りて弓形をなし猫の脊の如くならんか甚だ不可なり、而して正しく口を閉ぢ眼は中庸に餘り張らず、又餘り細めずして開き居るべし、閉づると熟眠することとある故なり、呼吸は鼻にて靜かになすべし、斯くして坐相全く整はば身體を靜かに左右に振り、而して欠氣を一つす、其身體を左右に振るは身相を整

ふるなり、體を靜かに振ること七八回なし、身を堅く据ゑ付ける如くし、靜かに深呼吸をなすこと三四回にして漸々止むれば呼吸は微かに通じて自然の調和を保ち得、此時に當りて調心の法あり。

調心法の要に曰く「精神をして身體の下部に充たし、心力を氣海丹田に集注し、心をば脚頭にあらしむ」氣海丹田とは梵語に優陀那、支那語に丹田と云ふ、臍の下一寸の處即ち下腹なり、此下腹に吸氣を充たし、呼氣及び吸氣は皆爰迄往來する如くならしむ、故に氣海丹田の稱あり。

精神をして身體の下部にあらしむるには、心力を腰部より兩股に掛けて集注するなり、最初の中は意の儘ならざるも、少しく之を積めば忽ち甘くやれるものなり、更に氣力を丹田に收む、代言すれば下腹に充分に力を入るゝなり、最初は坐して脊骨を眞直にすれば下腹は却て釣り上り力弱くなりて力の入り難きものなり、されど少しく之を積めば自然に甘くいくものなり、下腹に力を入るゝこと度に過ぐれば衛生に害あり、適度を要す、元來心は頭腦に宿れるものなるも、脚頭に精神をこめれば、隨て其處にある如く感ずるに至るものなり。

以上の如くなし來れば呼吸の出入は微かになり、全く止むかと疑はるゝ程となる、然るに身體は輕く雲にでも載りたる如く感ぜらる、而して手足は漸々暖くなり、頭は輕く清やかとなり、身心は脫け換りし如くなり、何等の慾もなくなり我身のあること、此世のあることも知らなくなる、即ち全くの無念無想となる、此境に至れば病氣は去り心身は健全となる、此時に手足溫かく眼光清く澄み、睾丸寬るく垂れ、下腹に充分力あるはよく成功したるなり、悟りを開くと云ふ事は專門家の說明に委し、唯爰には精神の修養、身心の健全を得る方法としてのみ之を述べしに過ぎず。

此調心法を自己催眠上より觀察せんに、之れは純然たる自己催眠なり、催眠法の原則中生理的の基礎は腦貧血を以て其尤なるものとす、故に思を脚頭に凝むれば其脚頭に血液を集め、腦を貧血狀態に導くことゝなるを以てなり、又催眠法の心理的基礎は豫期の作用なり、斯くすれば無想の境に入る、斯々の結果を得ると豫期して其通りの結果を得たるに外ならざるなり、而して禪の結果たる精神狀態は催眠狀態の或る階級と全く同一なければなり。

坐禪を止めることをば起坐法と云ふ、其解く處は催眠の覺醒法と原理異ならず、坐

禪の佳境に入りたる者の體內の血液の運行、諸機能の働きは自然の狀態にあるものとは大差あること、催眠者と覺醒者とに異らざるを以て、深き坐禪中の人を忽然起たしめんか、生理上に害あり故に催眠術の覺醒法と殆んど同一の法による其起坐法に曰く、

斯く端坐すること普通一時間を度とし、一旦休むで又之を行ふを法とす、而し初心の者端坐すること久しければ、足は麻痺し身體大に苦勞を感ずるものなり、故に必ずしも時間を墨守するに及ばず、凡そ三十分以上試み苦勞を感ずるときは、先づ起坐するをよしとす、起坐とは坐を起つの意なり、其法は先づ兩手を兩膝の上に安じ、徐々と身を搖かすこと七八度なし、次に口を開き氣息を吐き、兩手を伸べて盤を押へ、靜かに安らかに立つべし、其れは極めて靜々とするをよしとす、既に立ち終らば室內を靜かに步むで三週すべし、其廻るには右へ右へと順に步み、其步み方は前步と後步と相接する位にし、廣く跨がざるを法とす、此時も又精神を脚頭に充たし、元氣を氣海丹田に收め、苟くも雜念の爲めに胸中を充たしてはならず、而して再び禪を行はんと欲せば又曾て述べたる如く式により法に隨てなすべし、禪は何時何處

に於て餘暇に一寸之を行ふも必ず效あるものなり、よく此法に達すれば道を步み乍らも、臥床の中に入りたるときもよく調心の法を行ひ、禪の妙處に達するを得、古人曰く行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然なりとは卽ち此謂なり、吾人の云ふ自己催眠も又實に然り、練習を積まば何時にても一寸の餘暇に之を行ふこと自在なり、例へば馬車或は電車に乘りたるとき、一寸之を行はゞ精神は靜まり身體の疲勞を回復す、疲勞なきものは健康を增進す、此例によりて理髮店に至り己の番になる迄待合せる時間、汽車の發車を待合せる時間等、一寸の間にも之れを行ふて精神力を休養し無駄に費すべき時間を有益に利用することを得、又坐禪を應用して普通道を步み乍らも、調心法を應用して精神を脚頭に集注せんか、健康增進精神安靜を得て大に佳ならん。

佛敎上に於ては坐禪によりて悟りを開くと云ふこと等種々の利ある由なるも、吾人素人は單に心身の雜念を拂ひ、身心を安樂にし、膽力を養成し、白刃前に飜るも、大山後に覆るも毫も精神動かざる境に至る修養法として行はゞ最も妙ならむ。

坐禪實行中に奇蹟と云ふべきは、感覺の銳鈍と云ふ境あり、例へば線香の灰が落つ

る音が高聲に聞ゆることあり、之に反して傍らにて鐵砲を放すも知らずに居ることあり、又は幻覺錯覺を起すことなり、例へば庭前の雀聲が釋迦の聲に聞ゆることあり、眼前に何もあらざるに極樂世界にある寶山寶池を見ることあり、此現象は、催眠術に於ける幻覺錯覺或は感覺の鋭鈍と同一の現象なるを以て、敢て爰に其次第を喋々せざるも讀者の首肯する所ならむ。

佛教の奇蹟は爰にて筆を止め篇を改めて神道の奇蹟を見んとす、尙佛教の奇蹟を擧ぐれば遺あらざる程なるも、如上に擧げたる處にて其尤なるものを盡せり、より て爾餘の奇蹟は之を省略することゝせり。

第四篇　神道の奇蹟

第一章　神道の奇蹟概觀

我大日本帝國は卽ち神國にして、神道は我日本の國教なり、從つて我國の神代に於ける歷史の多くは奇蹟を以て成る、併し乍ら神代の奇蹟は余の如き淺學無智の輩が猥りに批評をなすべからざる所にして、又批評を許さゞるものなり、よりて余は神代の奇蹟及び我國上古の奇蹟に就ては堅く緘默を守り、章を改め神道各派の奇蹟の大要を摘出し、少しく論ずる所あらむ。

第二章　神道各派の奇蹟

目下我國に存在する神道は何派あるか、之れに就き皇典講究所講師某文學士に就て尋ねたるに、講師は調査の結果答へて曰く、內務省社寺局にて認めたるもの十三派あり、卽ち大社教、神習教、神道教、黑住教、禊教、金光教、御嶽教、天理教、大成教、神理教、扶桑教、修成派、實行教之れなり、と又余は國學院大學講師某博士に就て神道に於ける各派にて、行ふ奇蹟は各〻に如何なるものあるかを尋ねたるに、博士曰く奇蹟めきたる事は行ふ者あり、行はざるものあり、行はざるも行ふも某派は某派である、又甲派にて行ふ奇蹟と同一の事を乙派丙派丁派皆之を行ふ事あり、或は某派のみ行ふ事ありて一定せず、奇蹟の如何を以て各派を區別すべきものにあらず、又何派には必らず此奇蹟あり、或は此奇蹟を行ふと定まりたるものあらずと、誠に然るもの、

如し、余は神道十三派につき其れ〳〵に各〻一ヶ宛の奇蹟を擧げて評論することとせるも、奇蹟は其派にのみ必ず殊有のものにあらざるもの多し、又昔は斯る奇蹟めきし事をなしたるも、今日は大に其れを改良したる處等あり、此事を豫め御含みなりたし、又此の神道の諸派には順序あるべけれども、余は材料を得るに從て次第に雜然之れを記せり、見るもの其意して讀まれたし。

第一節　探湯式を行ふ（御嶽教）

神道の奇蹟中探湯式は著名なるものにして、獨り御嶽教に止まらず大概の神社にて之れを行へり、神社の境内には大概探湯式に用ふる石造の竈を具ふるを以ても知るべきなり、此探湯式の歴史的起原は左の如し。

應仁天皇の朝武内宿禰韓人を督して池を大堰に穿ち韓人池と號し、大に民衆の歸依を得たり、次で翌年勅を奉じて筑紫を監察す、宿禰の弟に甘美内宿禰といふ者あり、兄の威望隆々たるを嫉みて、帝に讒して曰く、兄宿禰前年來韓人の歸依深し今筑紫に據りて韓人を招き不軌を圖らんとす、と帝之を信じ使を遣して、武内を殺さんとす、武内聞きて歎じて曰く、吾に二心なし、忠を以て君に事ふ今夫れ罪なくして死す、何ぞ不幸の甚しきや、と漸く筑紫を脱して南海に出で、闕下に伏して自ら無罪を帝に申上ぐ、帝武内及び弟の甘美内を鞫訊して二人をして湯を磯城川の濱に探りて眞僞を神祇に質さしむ、然るに愈〻熱湯中に手を入るゝに及んで、甘美内の手焦げ爛れたるも、武内は何の異狀もなく、弟甘美内は神罰の明らかなるに服して罰せられたり、之れ日本記に記する所なり。

探湯式を行ふ

當時此裁判法は何事にも用ひられたり、今日之れを考ふれば甚だ野蠻なるが如くなれども、仔細に催眠心理學上より考察すれば大に道理あり、罪なくして湯を探らしむ、我心に一點の疚しきところなきが故に、精神自ら興奮し皮膚は緊張作用を起して如何なる熱湯も神經に何等の感じも與へず、加ふるに斯かる裁判法を行ふ時代なれば、勿論神の存在を深く信ずれば我れ罪なきが故に此の熱湯中に手を入るるも何等の害を受けずと確信するが故に、確信の結果何等の害なきなり、之れに反して眞に罪を犯せる者は、精神内に恐怖を生ずる故に、其手に焦爛を受くるなり、吾人は斯る古代の裁判法に於てすらかゝる一種の科學的心靈現象の眞理を知らず

識らず應用せるを見るに及んで、斯學研究のます〳〵興味深きを覺えずんばあらざるなり。

御嶽教は東都湯島靈雲寺の僧一心なるもの、信濃國御嶽山に登山して斷食潔齋して修業成滿し、神變不思議の祈禱を爲して幕府の手に捕はれ八丈島に流され、後赦されて歸り大貴巳命を祀り靈驗を說きたるに始まり、其教旨とする所は六根清淨を主眼とし家運の祝福息災延命を期するにありと云ふ、彼の自稱仙人片田源七は湯を煮沸せる釜中に茶碗を入れ置き手にて取り出せり(源七の仙術に就ては更に後に詳述する積りなり)之れは餘程確信力の强き結果なると、共に早く手を入れ早く取り出すにあり、夫れを恐圍〳〵手を入れ居ると火傷す、之は余が實驗したる處にて、早くさへせば決して火傷するものにあらざるなり、火傷せずとの確信强固なるを要す、若し確信弱く恐怖心あると火傷を免れざるべし、前陳したる古代の裁判法にて我には罪なし從つて火傷せずと確く信じて行へば眞に火傷なし、罪を侵せし者は火傷を免れざるならむと思ふてする故火傷するなり、湯花と稱する略式たる釜中を笹もて攪廻し身に懸ける法は正式の法にあらずと云ふ、其笹の露が身體にかゝると無病息災なりと云ひ傳ふ、之れ一種の自己暗示を高むる一法と見て可ならむか。

第二節　交靈術を行へり(天理教)

天保九年十月二十六日天理教の教祖中山ミキの長男秀司と云ふ十七歳に成れる少年が畑へ麥蒔に行きしに、左の足に疼痛を覺へ激痛堪へ難きに依り駕に乘せて連れ歸りたり、兩親は相續人の事なれば殊更に心を腦なし、醫師よ藥よと種々に治療を施せども更に何の效驗も見えざれば、其頃近村に修驗道を修する市兵衛なるものに乞ふて疼痛平癒の祈念をなす、市兵衛は中山家の奥屋敷の正面に新らしき薦を敷きて神を講じ、律義ある老婆ソヨを加持代に立たせて之れに御幣を持たせ、全力を籠めて祈念を凝らせしに、不思議や其效驗立所に現はれて秀司の病は癒えたり、然るに四十日斗りを經て再發するに及んで、再び市兵衛を招きて前の如く加持をなすに、復直に平癒せり、而して復一月餘を經て疼痛又起れば加持をして貰ひ加持をなして貰へば癒へ、斯くすること七八回に及んで全癒を見ざるうちに、其年

も暮れ天保九年の秋に至りて、尚健かならざればミキは自然其日その月が樂しからず、憂鬱のうちに日を送り居たるに、十月二十三日の夜秀司の足痛急に劇く起りたるより、早速彼の市兵衛に使を立て、彼是れするうちに、夜の十時頃となり、俄然ミキの夫善兵衛は眼の痛みを感じ、ミキは又腰の痛みを感じ、一家の騒ぎ言はん方なし、夜漸く更けて修驗者の市兵衛は來りたれど、例の加持代ソヨは障りありて來らず、誰にせんと相談の結果、市兵衛の曰く秀司殿の足痛は是れまで例のある事なれど、家内三人揃ひも揃ふて斯く病ひは恐らく之れ神の祟りなるべし、ミキ樣今夜は貴女が加持代に立たざれば神の祟は免れ難しと云ふによりミキは是非なく承諾して裸體となり水を被り白衣を纏ひ、御幣を持て例の如く神の座として廣間の正面に設けたる蓆の上に立つ、市兵衛はミキと對座し秀司と夫善兵衛は左右に侍せり、市兵衛今日は殊の外祈禱に力を入れて日頃の祈念に彌增して丹精を凝らし、流汗淋漓として瀧の如くに下る、列座の人々夢現の如くになりて其樣子を見つゝありしに、一陣の風颯と吹き來ると思ふ間に、不思議やミキの樣子何となく變り來りて、見る間に色變り身震ひ、手に持つ御幣は左右等しく逆まに立ち上ると見る間に、

ミキ兩眼を赫と見開き、極めて莊重に嚴格なる言葉を以て曰く我は天の將軍なり此の屋敷の地は天地創造の源也、今や時節到來せるを以て殘らず世界の人類を助けんために天降れり、よつて此の屋敷を始め親子諸共に貰ひ受けたし、と善兵衛を睨み付けたり、人々奇異の感に打たれて驚き怪しむこと限りなく、中にも善兵衛は何とも知れぬ怖ろしさに氣味惡く思へど、覺悟を極めて曰く家屋田畑は先祖より貰ひ受けしもの、子供は天より授かる所決して御上げ申す事は出來ずと云へど中中聞き入れず、泰然として終夜其の座を離れぬ樣子なれば、一座の面々も持て餘して、然らば何も蚊も御上げ申さんと云ふ、ミキはさも嬉しげに打ち笑みてやがて衿に復して寢に就く、さて寢所に入りて後間もなく寢所の天井嚮然として高く凄まじき響きありて、ミキは夢の如くに眼を開き大聲を發して「我は國常立尊（くにとこたちのみこと）なり、あらゆる世界の人類を助けん爲に、今此の土に降りて汝の身に宿るなり」と呼はり、家人の驚き騷ぐを叱して更に曰く「我は面定命（おもたるのみこと）なり、此の土に降臨してあらゆる人類を助けんが爲に汝の身を神の宿りに借り受けん」と云へりとぞ。

これ實に神人の交通とも云ふべきもの、其の態度の奇なるを以て虛構として捨つ

る勿れ、彼れが此態度は精神病學上より見れば一種の病的現象なり、催眠術上より見れば人格の變換なり、此現象が後に於て彼の如き隆盛なる一派一道を立てる根抵となり、彼の言語が今日四百萬の信徒に對する救ひの宣言となりしなり、あゝ心靈の現象も今更ながら不思議なるものかな。

此神人交通の現象は俗に中座と稱して多くの神道にて行ふところにして名高きものなり、唯其方法は派によりて多少の相違あるも、中座に神が乘り移りたりと云ふ現象は、吾人の云ふ深き催眠狀態にして、人格の變換したるものなり、此事に就て余は拙著「驚神的大魔術」中に降神術と題して詳述せり。

第三節　重病者を卽治せり（黑住教）

黑住教祖の黑住宗忠は神道垂加流の神道を究めたる人にして、嘗て思ふ樣神の心は何事につけても人間に幸福を與へんとするに外ならず、されば己れ神明たらんとするには、是非とも世人の喜ぶ事をなさゞるべからず、と惡を避け善を修し、身心を淸め精神を籠めて太陽を拜し、天地生々の靈機を自得し、之れを以て天照大神の

恩德とし、每年一度伊勢に詣づることを怠らず、後神書を講じ禁厭の法を行ふ、宗忠能く氣息を吹きて人の病を治し、其信徒最も多し、彼は自己の經驗上心の持方一つにて如何なる疾病をも全治し得るものと確信し、其禁厭を乞ふ者に向つて、屢次之れを行ひて平癒せしめたるもの多く、躄者にて歩行し得たる者あり、天刑病と云はるゝ彼の癩病患者を平癒せしめし事あり、盲人にして再び光を仰ぎ得たる者あり、肺病患者にして九死に一生を取り留めたる者數知れずと云ふ、斯かる事實に對する原理の一般は、余が既に基督敎に於ける治病の奇蹟に就て述べたる所と異ならざれば、爰には其原理を省略し唯黑住宗忠が禁厭にて初めて重き病者を治したる顚末を記して參考に供せん。

或る日の事なりき、宗忠の召使の下婢某女が、非常に激しき腹痛を起し、終日終夜苦しむにぞ、宗忠は之れを見兼ねて自ら某の腹部を抑へ、呼氣を吹きかけ自家獨特の禁厭法を施したるに、腹痛忽ち止み翌朝は常の如くに治して昨夜の苦悶を知らざるものゝ如くにて、前の小川にて洗物をなし居たり、近處の人々は昨夜下女が苦しむ聲を聞き、それが餘り激しそうなれば、何れ死したる事ならん抔語り居たるに、此

有様なればさても不思議な事よ、御身は如何にして全快なされしや、と其の仔細を問ひたるに下女は「御主人様の禁厭にて夢の様に全治しました」と答へたり、近處の人々之れを聞き、さて〳〵其禁厭の效顯の著しき事よ、と此の事誰云ふとなく擴まりて、其後は宗忠に禁厭を乞ふ者門前に市を爲せりといふ。

又教祖宗忠年三十三の時、肺病に罹り殆んど死を待ちしが、或朝太陽を拜して深呼吸を爲したりしに、陽氣胸間に徹し心氣頓に爽快を覺へて歡に堪へず、思はず陽光を嚥下せしに心氣頓に快活を感じ、病疾遂に癒へたり、後之を「息吹の眞理」と稱し此法に依れば、如何なる病氣も平癒すべし、と其の方法に、曰く毎朝天日を拜し、陽德の光輝を景仰し、快活の陽氣を吸集し、丹田を充實せしめ次で諸神を拜すべし、と此の黑住教の息吹の眞理は今日衛生法として、人の稱揚する深呼吸法にして、生理上より見るも、新鮮の空氣を吸入して肺臟の働をよくし、血液を清潔にし身體を健康とならしむ、心理上より見るも雜念を去り精神を沈靜せしめ、腦を明快にし、神經を強健ならしむる效用あり、之に尙宗教上にては神の力によりて病治すとの豫期作用加はり居るを以て、效力は一層多くある所以なり。

第四節　忽ち雜念を去らしむ（禊教）

黑住教の後に出でたる宗派に禊教（みそぎけう）と云ふものあり、開祖は井上正鐵といふ者にして、始め正鐵は飲食を斷ち、水を浴び坐禪をして、觀念を凝らすと雖も、何も得ることなくして力盡きて空しく過すうちに、四十歳の春一夜床中にて種々觀念し居りしに、夢幻の如く一人の若き女ありて、正鐵に大道を傳へんとて明玉を口に授け、入ると覺へて眠り翌朝眼醒めて起きし以後、始めて惑ふ所なく遂に禊教を創立せりと、彼の傳に記しあり以て其宗派の成立を推知すべし。

此禊教に「トホカミエミタメ」の法といふものあり、其の法に曰く「トホカミエミタメ」と何十何百遍となく唱へ居ると、無念無想の觀に入る、其時我れを知り神を知り得るは之れ全く此詞が他の祝詞（のりと）や祓（はらひ）に勝られし處あるに由る、皆これ禊大神の威靈著じるしき證左なりと、主張せり彼は此の法の爲めに三宅島に流されたりしが、正鐵島にありて晝夜の別なく「トホカミエミタメ」を口唱して、終に禊の奥儀に達し、許されて江戸に歸るや「トホカミエミタメ」の一派を起したると云ふ、此「トホカミエミタメ」とは

如何なる意義の語なるやを知らざるも之れを「何十何百遍となく唱へ居れば無念無想の觀に入らん」と云ふに至つては道理あり、斯かる無意味の語を何十何百遍となく繰り返して唱へ、一心となり他の事を考へる暇のなき樣なし居れば、自然に聯想作用防がれて、朦朧たる意識となり、次で全く無念無想の境に入る、此の無念無想の境は吾人の所謂催眠狀態なり、「トホカミ」を唱ふるは卽ち自己催眠を行ふと見ることを得、自己催眠法として有力なりと人の唱ふる所の自己の呼吸を算する法は其理同一なり、自己催眠の狀態となれば、見神見佛其他不思議と思ふ精神上の現象も自在に起すことを得、彼の耶蘇のアーメン日蓮宗の南無妙法蓮華經も禊敎の「トホカミ」と其理を一にすと思ふ。

第五節　蟇目の法を行ふ(大社敎)

蟇目(ひきめ)の法は獨り大社敎に止まらず、多くの宗派にて行ふよし、又其式も派によりて多少の相違ありと云ふも、余が聞きし儘を左に記さむ。

蟇目とは矢の一種にして其彫蝦蟇の目に似たれば斯くは名づけしものなりと云ふ、此の矢を番ひて弓弦を鳴らせば、惡魔退散すと傳へらる、之れに就ては種々異說あれど、歷史的の考證を茲にする要なし、今之れを大社敎に於て行ひたるものといふ說に從へば、古誕生又は病魔に襲はれし時に行ひたるものとせり。

平家物語に堀河院御在位の時、おびえたまきらせ給ふことありしが、義家朝臣南殿の大床に待て御惱の刻限に鳴弦すること二度の後、高聲に「前の陸奥守義家」と名乘りたれば、聞く人身の毛よだち、御惱怠らせ給ひしと見え、又源氏物語夕顏の卷にも、此の事を記し、其他古代宮中御惱の時此法を用ひさせ給ひて、御惱の失せたる事例多し、今日民間に於て神官が此法を行ひ疫病を除くと稱せり、之れ卽ち祈禱療法にして神官は斯くして必ず疫神を除き得と確信し、病者は神官の祈禱によりて必ず除き得らると豫期して疑はず、よりて其豫期及び確信通りの效果を得るなり、換言すれば精神療法の一種なり。

第六節　思ふ事を叶はしむ(金光敎)

金光敎は備中淺口郡の農夫藤井文治郎が、嘉永五年十一月開きしところのもの

り、文治郎生れて以來幼少より神を信ずる心深かりしが、一夜夢に神より金光大神の物を與へられたりと稱し、姓を金光と改め以て金光教を開設せり、即ち其依るところの神金光大神は他の神達と違ひ靈驗最も著しければ、能く之れを信ずる人は決して災危凶禍に罹るの憂なし、若し未だ金光大神を信ぜずして、疾病に惱み災禍を受け居る人も一たび金光大神を信ずる時は、忽ち病は癒へ禍は消散せんと云ひ、其信條は別になく祈る呪文は如何なるものなるやは未だ之れを知らずと雖も、彼等信徒の祈る所を聞くに「天地金の神様、金光大神様、南無親神様」など云へるを以て考ふれば、之れ金光大神とは天地金の性を有せる神様にして、而かも最も主となるべき神所謂親神にして效顯あらたかなるものとするが如し、之れが學理上の解釋に至りては前に暫く述べたる所の暗示療法の理によりて明らかなるを以て、爰に又之れを贅せず。

第七節　一生涯安心を與ふ(修成派)

明治二年新田邦光の主唱する所、其の教旨とする所は造化の三神を立て、人間の身體は肉身血氣を父母に受くると雖も、其の主とする心魂は造化の三柱の神より受く、故に此心魂は一身の根本にして、神より出でしもの、されば神に念じて幸福を得んとせば、神典に所謂天神諸命以詔伊佐諸伊佐冊三柱神、修理固成是多陀用幣流國」の語を活用して心魂を正しくするにあり、而して之れを修せんとするには、日神、光彩、明彩の神德に則りて「修理固成、光彩明華」の八字を神様に向ては勿論、行住座臥此八字を念誦すれば、一生涯安心を得、無病健全なるべしといふ、此念唱は禊教の「トホカミエミタメハライタマヘキヨメタマヘ」と同一理にして、其れを一心に唱ふれば神が幸福を必ず與ふと豫期して唱ふ故、豫期通りの效果あるなり、殊に同一文句を千遍一律に唱へ居れば、自然に精神沈靜して精神を快活に肉體を健康にする效力あり、よりて右現象は心理及び生理上より立派に說明し得らるゝ所なりと信ず。

第八節　守札の靈驗著し(神習教)

美作の人芳村正乘の主唱になる、教祖故ありて京都の鞍馬山に隱れ、石上に靜座沈默して起たざること數月、忽然として神と交通し山泉を呑みて神氣を受け、大神宮

の靈告を得、神明の感得を享け得たりとて、明治十三年内務省の許可を得て此の教を始め、守札神符等を信者に與ふるに靈驗高しといふ、神との交通云々は降神術の一種にして、守札神符の靈驗は自己暗示の結果なる事は今迄屢〻述べたる處なるを以て、讀者の既に解する所、故に又此に之を贅せず。

第九節　禍を未發に防ぐ(神理教)

此教は豐前國菊野郡德力村の人佐野常彦の始むる所にして、饒速日命の遺教なりと云ふ、靈魂轉生、禁厭符呪、卜占を主とし、人の運命を豫知し禁厭祈禱に依り、禍を未然に防ぎ幸福を得べしと其神符なるものは一定せざれど、概ね元祿時代より傳へ來れるものを使用せるもの〻如し、此靈魂轉生とは一度死するも二度生れ代ることにして、不幸の人は幸福の人と生れ代るを云ふ、之れは單に假定說ならむ、生れ變ると云ふ事は人のよく唱ふるところなるも、實際に立證し得ることにあらざるを以てなり、禁厭符呪、祈禱等の效力は自己暗示にして、卜占運命の豫知云々はよく其現象を明にせざるを以て斷言するを得ざるも自己催眠狀態にある降神術の一種なるか、將又入卦の類ならむ、

第十節　劍渡を行ふ(大成教)

元來神は萬能の力を有す故に如何なる奇妙の事にてもなし得ると信ずるものあり、本節に擧げたる劍渡は獨り此教に於ける獨特の奇蹟にあらず、何派を問はず、神官にして之れを行ふものあり、余が見たる某神官が行ひたる方法を次に紹介せん、先づ神前の周圍に青竹を立て七五三を吊り、衣冠を正しく着して祝詞を擧ぐること稍暫くして、兼て裝置せる劍の梯子を上れり、其劍はピカ〳〵光らしめるも刃は立ち居らずして摺木の如し、それを而かも神官は刃の上に足を載せずして劍の平に足の平を載せ、兩手にて楷子の親木を堅く握り力を入れ手にて身體を支へ、足はほんの言譯のみに劍の平に附けるなり、而して順に上に上れり、余はそれを見て噴飯に堪へず、夫れでは瞞着の手品に過ぎず、斯かることが神の力によると云はんか、神樣は飛んだ迷惑ならむ、大成教にて行ふ劍渡は眞成のものなりと云ふも余は未だ其れを實見したるとなし、然し余は仙人の名ある宮城縣人片田源七の劍渡を見て

大に敬服せり、源七の使用せし劍は信に切れるものにして、而かも源七は楷子の及に足の平を載せ、兩手を離して拍手すること數回なればなり、此源七の身體は普通の人と少しく異りたる所あり、又精神上に於ても決して及に身を載するも切れることなしとの確信强固なる故ならむ、其精神狀態は恰も催眠者に向つて、汝の手は鐵の如く固くなれり、棒を以て突くも傷かずと暗示すれば全く其の通りとなると同一原理ならむ、尙片田源七の仙術に就ては後に逃ぶることあるべし。

第十一節　火渡を行ふ（神道教）

火渡の仕方に種々あり、東京麻布の渡邊千冬氏邸內に於て曾て學者集まり學術上より火渡の如何なるものなるかを研究せんとて實行せり、然るに其日の火渡りは異の火渡にあらずして、火の上に濡れ砂をかけ墨となして其上を渡りて見せ、見たる者は馬鹿〳〵しくて談話にもならぬとこぼせり、此類の火渡を似非行者到る處に行ひて異の火渡の邪魔をするものあるは嘆ずべきとなり、余が見たる火渡は神道教の一神官が行ひし者にて、實に余をして驚かせり、薪を燃やしたる火焰は丈餘

に達せり、其中を通過すること數回、燃火の中央に到りし時は火焰にて神官の姿は見えず、其衣も何にも少しも燒ける等のことなかりし、又余は別の神道教の一神官が行ひし火渡を見たり、之れ又大に余を滿足せしめたり、此度の火渡は炭火にして數俵の炭を熾火として其上を跳足にて歩めり、或は荒く歩み或は靜かに歩み、荒く歩む時は足の平にて炭火を叩きつけつゝ渡り、靜かに歩む時は炭火の上をチョイチョイ歩めり、之等の現象は奇は奇なりと雖も、催眠者に向ひて今汝の手に燒火箸を觸れしめんと暗示し置き鉛筆を催眠者の手に觸るれば、催眠者の手は火傷を起す、之れに反して催眠者に向ひ鉛筆を汝の手に握らすと暗示し燒火箸を握らすも催眠者は鉛筆を握りしに異らず、少しも熱さを感ぜず、前記火渡の現象は神の靈驗により必ず渡り得ると確信して後行ふ故渡り得るなり、之れは催眠者が鉛筆と信じて燃火箸を握りて異常なきと心理的の論據を同ふするものなり、加ふるに火焰中を通過する如き、炭火の上を通過する如きは、存外危險少なきものなり、試にランプの火焰中を白紙をして通過せしむるも異常なき事と、燃火を指先にて早く摘みて他に轉ずるも、早くさへせば指先何んともなし、之れによりて是れを見れば、自然

に其理を首肯するなるべし。

第十二節　幽明界を明にす（扶桑教）

永祿三年四月八日肥前長崎の人藤原角行なる者、富士山に登りて種々の苦行を積みて神祇に祈りたるに、一夜神靈の顯示を受けて天下の變亂及び諸病を治することに力を盡したるもの即ち此教なり、其教ふる所は神德の無量無邊なるを信じて神を念ずれば、自ら天地幽明界を明らかにすといふにあり、幽明界を明にすとは如何なることか神に近づきたる精神狀態となりしを云ふならむか、果して然らば事更に其原理を爰に說明せずと雖も、曾て述べたる所によりて其現象は理解し得るならむ。

第十三章　家運長久家內安全ならしむ（實行教）

天祖の三神を主神とし、富士山が地球の精神なることを信じ、次に皇統の一系たるを信じて神を念ずれば、家運長久家內安全なりと、これを實行教の教旨とす、要するに一種の山嶽崇拜教にして、富士山の如き高山を觀想する時は、一種崇高なる念慮を生ずる精神作用を利用して教を立てたるものならんか。

以上にて神道十三派を述べ盡せり、然れども神道中世人の注意し居る派此外に尙數多あり、奇蹟として擧ぐるに足らざるも、其中尤もなるもの一二を蛇足を顧みず附記せむ。

第十四節　萬物一體の觀を顯はす（丸山教）

神奈川縣橘樹郡稻田村に本院を置く、主神は天御中主神、高見皇靈神、神見皇產靈神を大元の父母とも大御祖神とも稱して、これ等の神々を念ずれば、天神合一し萬物一體の觀を爲すに至ると稱す、萬物一體の觀とは自己なく他人なく此世なき無念無想即ち吾人の云ふ催眠狀態を云ふならん。

第十五節　疾病を治し幸福を得しむ（蓮門教）

豐前小倉の人島村ミキによつて開かれたるものにて、彼の德川時代に禁ぜられた

る日蓮宗の不受不施の信徒が密かに神に托して信ぜし者が、終には斯かる神佛混同の形式を以て生ぜるものなりといふ、其の教條は「東の妙法」とて神の前にて南無妙法蓮華經などを唱へ、又「妙」といふ語を連唱し以て病氣平癒の祈禱をなし、「お籠り」と稱して夜中堂内に籠りて祈禱を爲し、以て病氣平癒幸福等を得らるゝと云ふ、著者の近隣に蓮門教の本部あり、其の神殿の宏壯なる實に人目を驚かすばかりなり、而も其れが一婦人に依つて起されたりと云ふに至つては、又其偉大に驚かざるを得ず、疾病を治し幸福を得せしむとの原理に就ては、之れ又前に暫ゝ述べたる自己暗示精神治療の原理と同一ならむ。

神道の奇蹟を尙擧げ來れば枚擧に遑あらざる程なり、然し以上にて不完全乍ら其一斑を盡したれば、爰に其筆を擱かんとするに當り、一言述べて讀者の參考に供し度き事あり、其は他にあらず近來世人が嘖々として傳ふる所の宮城縣人片田源七の行ふ所なり、其は事實談にして余の實地目擊したる所なり、確に奇蹟として傳ふる價値ありと信じ、次に其次第を記して讀者に紹介し本篇を結ばんとす。

仙術（片田源七）

明治四十二年九月七日のことなりき、東京に名高き上野公園内常盤華壇で蓬仙人事片田源七が仙術を演つた、先づ初に「天照皇大神大天狗小天狗東京では水天宮」と八百萬の神の名を元氣よく叱るが如く怒鳴るが如く唱へてから「ヤアッ」との氣合諸共、沸々と煮立つ大鍋の中から茶碗を三つ取り出す、其鍋の中へ兩足を踏み入れる藥鑵にグラ〳〵沸騰してる湯を見物人に濺の樣に掌に注がせる、兩手で抱へる程の石で我と我頭をコツン〳〵遣る、手も足も更に何んともない、今度は長三尺太さ中指位の二本の鐵棒烈々たる熱さの見るから凄く赤きを例の大喝一聲「ヤアッ」と云ひざま手で掌握りにした儘ッイと扱く、右手左手一回二回……五回六回七回八回トヽ鐵は元の黑色に歸る「どうだ手は此の通りだ、何ともない、チッとは臭ひだろう、錆があるからな」得意なものである、さて殿は及渡り、千番に一番の兼合ひ、足の踏み方にお目止めて御覽じろとも何んとも言はず、又た「ヤッ」と聲掛けて踏み上つたは一個の梯子、其横木にはスラリと拔かれた白鞘の業物六本明晃々たる及を上方にしてさながら人の血潮に飢へて居るかのやうに列んで居る、見物席の醫學博士岡田和一郎氏夫人幷に令孃を始め女中も半玉も藝妓も顏を背けて居る「ヤッ」と

一段上る又「ヤッ」二段に上る……六段上つた又一段〳〵下る實は余も此時こそはハラ〳〵した。

列席の岡田和一郎博士其現象を科學的に説明して曰く「仙人の妙技は少しも不思議はない、一つは精神作用で最初神に祈りを捧げて一心を其技術に凝め、如何なる苦痛も我慢して退けやうと云ふ一種の暗示サッヂェスチョンを精神に受ける、第二は身體の修練で、長き間練習に練習を重ねた結果、肉體は所謂學語で角質變化をして居る、能く我々の家庭でも、自分では熱くて持てぬ鍋を女中は平氣で兩手で持つ、其兩手は練習を經て居るからである、又我々が催眠術に掛つて赤い火を握る、其當時は熱いと思はなくも手は物質である、火は其細胞を燒くべき物質であるから火傷は立派にして居る、ツマリ此仙人は精神的修養と肉體の角質變化とを兩方備へて居るのであるから、熱くも痛くも我慢が出來られる、外に肉が堅くなつて所謂タコが寄つて居るから火傷もしない、切れもしないのである、思うに如斯事は一つは教育上善き事である、精神を一所に集注すれば何事でも出來る練磨に練磨さへ經れば何事でも出來ぬものはないと云ふ實物教育を與へるものであると思ふ云

云……」源七仙人に聞くと、……ハイ當年六十八ですが六十一の八月から練習を始めました、此七年餘と云ふものは女色を絶つは勿論、肴や肉類を全く絶ち、そして技術を遣ると云ふ日になれば、その朝から鹽絶ちをし、御飯と水ばかり用ひます、三日續けば三日飯計り、中々辛い事です、今度は關西で十日續けざまに遣るのですから辛い事でしよう云々……」と。

萬朝報は前記藝仙の術を評論して曰く「予輩が怪しむ所のものは、當日常盤華壇に立會人として來會せられたる岡田博士が、彼の藝仙の術を演ずるを見て『仙術にあらず確信と熟練の致す所なり』と云はれたる事是なり、何となれば、予輩も亦敢て源七の所爲を、眞個仙術なるものなりとは信ずるものに非ずと雖も、さりとて之を博士の如く、確信と熟練の致す所なりとは、尚更信ずるものに非ず、請ふ其所以を述べしめよ。

若しも博士の言の如く、確信を有し熟練を積まば、以て何人も藝仙たるを得べき乎、予輩の見る所を以てすれば、如何に確信ありとは云へ、熱湯の中に肉身を入れて糜爛せざる者のあるべき道理なきは、苟も常識ある者の知る所にして、之を敢行して

平然たるのみならず、左までの痕跡を留めざるは、到底普通人間の爲し得る所にあらざるなり、況んや刀を以て傷くるも、熱湯を以て之を拭へば、忽ち癒へて舊の如くに復るが如きは、如何に確信あるも爲し得べき事にあらず、而して之を熟練の結果なりと云ふも、常人にありては未だ熟練せざる前に方りて、既に全くの廢人たらざるを得ず、知るべし確信のみの力にあらず、又熟練の結果にも非ることを。

然らば彼源七なる者は、果して仙術を有するか、否々、予輩も亦之を眞正なる仙術てふものなりとは斷言せざるも、世には今日の人智を以て、未だ知り得べからざること多からん、然るに些の研究をも爲さずして、直ちに何等かの解釋を與へざれば、學者の體面を失ふが如くに思惟して、漫然之を速斷するは、學者の本分に背く事なき乎

「不知爲不知是知也」とは曾て先哲の誨ふる所、予輩は蓋仙の仙術を姑く仙術と爲し、以て研究すべき價値あるものと信ずと。

著者は岡田博士の說を正當と信じ萬朝の說を採らざるものなり、其次第は爰に喋喋せずとも卷頭より爰まで讀み來りし者は、自然に著者の意の有る所を諒知せらるゝならむ。

魔術（ユーザビア）

歐洲諸國の學者をして驚かしめたる現象を呈するユーザビア女史に關して曾て萬朝の言論欄に次の如き說見へたり。

十餘年來歐洲諸國の諸學者が頭腦を惱まし多額の金錢を費消し、研究に研究を重ねて、今日に至るも尙解釋する能はざる一問題あり、而して許多の新聞雜誌は此記事の爲に幾干の紙面を費したるやを知らず、然も疑問は依然として疑問なり、此問題とは何ぞや、曰く使魔女ユーザビア即ち是れなり。

使魔女ユーザビアは伊國一農夫の娘にして、同鄕の一農夫に嫁したるものなるが、辛じて自己の氏名を書し得る程の無敎育者なり、此女不思議の魔術を行ふ力を有し、此の事の世に傳へらるゝに及び、最先に之れを研究せんと試みたるは西班牙の哲學家アヤヴェド敎授にして、幾多の研究の後遂に之を解する能はずと爲せり、爾來學者の注意を喚起し、此程物故せるロムブロゾー博士の如きは無二の唯物論者なりしが、此魔術を研究したる後は唯心論者に變じたりと

すら傳へられ、有名なる星學者シャッパレリー教授も之を研究し、巴里のリシエー教授、ジェロサ教授、エルマコラ博士等も之を研究し、英國のシドウィック教授、マイヤース氏、サー、オリヴアー、ロッジ氏等も亦之を研究し、歐洲諸國の有名なる學者は殆んど皆之が研究に力を盡さゞるなく、使魔女ユーザピアは伊國は固より、英、佛、西、露の諸大學に於て研究の資料に供せられたり、然れども此等の諸學者は此女が不思議なる一種の力を有するものなりと解するの外、何等の解釋を與ふるに由なく、ユーザピアに對する疑念は益〻之を深からしむるのみ。

此使魔女の事を聞く者は先づ詐欺の手段に非ざるやを疑ふ、然れども其詐欺に非ざるとは魔術を目擊したるものゝ直に解し得る所なり、次で動物電氣の一種に非ざるやを疑ひ、或は感應術の一種に非ざるやを疑ひ、種々なる解釋を試みんとするも、ユーザピアの魔術は餘りに不思議にして、現今諸學者間に使用せらる術語を以て此魔術を說くと能はず、今ユーザピアが演ずる魔術の二三を擧ぐれば、電燈の光り赫々たる大學の講堂内に於てユーザピアを椅子に座せしめ、其手足を縛し置くも、ユーザピアは己れの後方に他人の隱し置きたる器物を前面の卓上に自然に動き出さしめ、或は己れの頭上に不思議なる人體を現出せしめ、或は研究者の顏に空氣中より現出したる手を觸れしめ、研究者をして覺えず慄然たらしむるとあり、又數人の乘りたるベンチを空中に浮上らしむるとあり、此等の魔術を行ふときユーザピアは昏睡の狀態に在りて、自から何事を爲したるやを知らずと云ひ、悉く是れ神の所爲なりと稱す、而して平時の擧動は毫も常人に異ならざるなり、ユーザピアが行ふ所の奇術は此他に於て種類甚だ多きも一として新奇の現象ならざるなく、他人の爲し得べきことに非ざるなり。

之を解釋すると否とは科學者に取りて大問題なるは論を俟たず、然れども固より國家の運命に關すべき大問題に非ず、又人生に直接の影響を來すべき問題にも非ず、故に我邦の科學者が此問題に關して既に研究の歩を進めつゝあるや、或は今新に之が研究を開始せんとするやは、敢て問ふ所に非ざれども、今此一女子に關して歐洲諸國の學者及び諸人士が疑惑の中に包圍せられて、之が解釋に腐心するは殆んど狂せるが如きなり、近來泰西諸國に於て此種の研究益〻歩を進むる時に方り、此不可解の一奇現象に遭遇したるは奇と謂ふべし、彼我科學者の

研究に冷熱の差異著しきものあるを感じつゝあるに際し、偶〻此の事を記す。

と又東京朝日には之れに關して左の文見えたり。

先達物故したロムブロゾーが立會の上でイユーザピアと云ふ女に就て、スピリチユアリズムの試驗をしたことがある。此女は能くこんな試驗に使はれる女で、時々佛蘭西迄やつて來る。ブルスの一教授が此女の試驗をするとて、ロムブロゾーを招いた。ロムブロゾーは最初斷つたが、再應望まれて終に立會つた。

元來神降しには仲介者が必要で、云はゞ巫女の樣なものだが、つまり目に見えぬ力が其女に乘り移るのである。イユーザピアと云ふ女は何[illegible]丈夫な紐で縛つて置いても自然と空中へ舞上がる。空中で邯鄲夢の枕に横に成る。手を出さないで風琴を鳴らして見せる。

此女は時々身丈が四五寸位高く成たり、低く成つたりする。宛然讃謨の樣である。手足も何本有るか分らない。見物人が疑つて、一生懸命に此女の兩手を捕まへて居ると、何處からともなく外の手がにゅっと出て來る。

イユーザピアは人から催眠術を掛けられるのぢやない。自分一人で夢幻の狀態

に入る。光づ深い溜息を吐く、欠呻をする、吃逆をつく、いろんな違つた顏をする。時には奇な笑ひ方をして氣味の惡い面附に成る。時には又顏を赤くして、眼も變に輝いて來る。色氣たつぷりの厭らしい笑方をして、傍に居る人の肩へ凭れかゝる。斯う成ると、愈始まるんだ。

夢幻の狀態に居る間は、身體がしやちこばつて、眼を白眼だけにして居る。意識も餘程ぼんやりして居るらしい。當人に聞いて見ると、最初に先づ突如として、左樣いふ現象を起したいと云ふ希望が起る相だ。次に痲痺と戰慄とを感じてそれが段々增して行くと、同時にぞつと脊柱に水を注がれる樣な氣がして、それが急速に全身に及ぶ。それから始まるのだと。

ロムブロゾーは歸つてから此女に就て論文を公にした。それは略して置く。

と此ユーザピアの行ふ處の現象は如何に附會するも科學上より今日の處說明する能はず、記して以て學者の參考に供せむ。

或人曰く、著者が宗教上の奇蹟中幻覺又は錯覺を以て說明したる處の多くは、ユーザピアの行ひたる處と同一徹にして、到底科學を以ても哲學を以ても說明すること

と能はざる現象と觀るを至當と信ず、著者の說明の如きは實に淺薄なる皮相の見に過ぎずして眼光紙背に徹せざるものなり、と此說或は眞理なるやも知れず、記して、以て他日に徵せむ。

第五篇　結論

余は宗教上に如何なる奇蹟が存在するかを探りて見んとしたれば、神變不測の事柄續々として現はれ來り、殆んど底止する所を知らず、尙世界各宗派に一宗各〻其一を選び來るも、殆んど數ふるに遑あらざるに及ぶ、よりて余は漸く爰に上の如きものを擧げて、宗教上の奇蹟の一般を示したり、之れ敢て其の要を得たりと云はざるも、亦以て我國、上古以來現今に至るまでの一般宗教の奇蹟は、大抵盡したる積りなれば、一と先づ爰に奇蹟の現象を擧ぐることを止め、最後に之れに就き一二所感を述べて結論とせん。

先づ現代に於ける奇蹟の價値如何に就て述べん、廿世紀に不思議なしとは實に吾人が現代文明の賜物として大に誇る所、苟も輓近科學の眼を以て見れば、何者と雖も理義照々として世に不思議抔と稱するものは次第になくなる、こゝに於てか奇蹟の如きものは、何等の價値なき古代未開の人の迷信に過ぎざるが如き觀あり、然り多くの奇蹟は實に未開時代の迷信に過ぎざりき、然れども之れを以て全然無價値なるものとして拋棄し去る事能はざるものあり、卽ち奇蹟其物には古代の未開人の尊信せし如き何等敬虔すべく尊信すべきものは無しと雖も、之れを應用するときに於ては少くとも其價値は覆ふべからざるなり、學者間には嬉詞邪敎として排斥されつゝある某宗敎の如きも、尙下層社界に多數の信徒を有するを見れば、世は文明と云ひ開化と云ふも、何時の世が萬民悉く開化の恩澤に浴する事を得べき、然らば其下層社界の者が求むる宗敎は高遠なる宗敎にあらずして卑近なる宗敎にして、而かも其求むる所は理論にあらずして、現實上の奇蹟にある事を知らん、之れ等の奇蹟にして有害ならんか、勿論吾人は極力之を排除すべきなりと雖も、之れを研究して無害有效なりと信ぜば、應用して以て人生の幸福を企圖すべきは先づ學者の任務なりと信ず、宗敎改革者として名高きルーテル曰く、小兒を遊ばしめんとすれば小兒たらざるべからずと、無智の人民は實に世の小兒なり、彼れ等を慰め

て幸福なる世に遊ばしめんとするには、學者先生達にはッマラヌ小供の戯れとも思はるゝ奇蹟的現象も、必ずしも捨て去るべきにあらず、然れども是處に是非心得ねばならぬ事あり、それは他なし、昔の小兒と今の小兒とは小兒其者にも雲泥の相違あり、今日は昔日と異り教育普及し、人智發達せるを以て昔時のそれと比較すれば、遙かに進歩し居ることは云ふまでもなし、されば之れを應用するに古代に行ひたるが如きものにては其功あるべきにあらず、進める時代には進める奇蹟を要す、進める奇蹟とは何ぞや、卽ち學理と實際に照して確實なるものなり、而して眞に世を益し民を救ふに足るべきものありて始めて奇蹟は價値あるべきなり。

次に奇蹟の行はるゝ學理上の根據及其方法如何に就て述べん、學理にて說明し得ざる現象今日に於ても尙存在するか、余は確かに存在すと信ずるものなり、現に世界に於ける文明の中心とも云ふべき歐米に於ける大學者が學理にては說明し得ざる不思議の事を確に認めたりとの事實を、著書に新聞に雜誌に演說によりて公にしたる事尠なからず、我日本に於て之れを譯したる書又少なからず、曾て述べたるユーザピアの魔術の如き拙著、不思議の研究に集めたる、橫山理學博士の筆に成

れる「不思議の降石」及び「原因なくして物品飛ぶ」と題したる記事の如き其一なり、殊に英國の精神研究會の報告書には學理にて說明し得ざる不思議の事實が每號に滿載せり、其れを見たる者は、皆等しく首肯するところならむ。

本書に集めたる宗教の奇蹟中不可思議なる者は余は之を主觀的の現象と見て解釋したり、主觀的に見れば之を悉く可能の事と解するを得るのみならず、余の如き平凡の者と雖も奇蹟同樣の現象を容易に起し得ればなり、然れども之を悉く客觀的の事實なりと認めんか、如何に苦心するも、道理に合はず、彼の耶蘇が海上を步行したりといふ如き、魚口に金を生ぜしめたりと云ふ如き、又禪宗にて木像が首を動かしたりと云ふ如き、日蓮宗にて刀刄が段々に壞はれたりと云ふ如きは、如何に考ふるも合點行かず、然れども人或は云はん、今日尙西洋に於てさへ學理にて說明し得ざる不思議のとあり、其れと宗教の奇蹟は同樣のものにて、如何なる學者と雖も說明することの出來ざる不思議の事をなしたればこそ宗教の奇蹟と稱して萬世の後に至るまで其れを尊重するなり、若し宗教の奇蹟なるものが主觀的の現象に過ぎずとせば、精神病者が幻覺錯覺によりて起すところの妄想と何の異なる所か

ある、彼と之れとは心理的の解釋は同一にあらずや、宗教上の奇蹟の多くをして斯の如き者と混同するは甚だ當を得たるものにあらず、其れは畢竟宗教上に於ける偉大なる神卽ち絕體萬能の力ある者を認めざる無神論者の暴言にして取るに足らず、と此論或は正鵠なるやも知れず、然れども、余は暫らく此說を排して主觀論を固守するものなり、何者は客觀說は單に想像に止りて、一も確實に立證すべき點なきに反し、主觀說によれば現に吾人が奇蹟同樣の現象を實現し得ればなり。

殊に一部の宗教學者は曰く、宇宙は廣大なり、人間は小なり、人智は有限なり、道理は無限なり、此小なる人間が大なる宇宙を解釋し盡さんとするは抑〻無暴の極なり、此有限の知識を以て無限の道理を知り盡し明らめ盡すことは到底不可能の事なり、奇蹟は神佛の上に行はれたる無限有限の事なり、到底人間の智力を以て解し難き者なりと、されど一體神佛とは何を指すものぞ、若し或る人格を備へたる者が在りて之れを爲すと信ずるが如きは根本的の誤謬たるは今更云ふ迄もなし、今日進歩したる宗教學上の神佛の解釋はある理性其者に名づけしものに過ぎざれば、吾人が向上發達して此理性を認識したる時やがて神なり佛なりと一致せるなり、既に理性が發達して神佛と一致するに到らんか、吾人は直に此理性によりて得たる奇蹟を行ひ得べし、而も奇蹟なる者は奇怪厭ふべきものにあらずして、實に明白一點の厭ふ所なき學理的奇蹟を行ひ得て、人類の幸福を增進すべきなり。

最初余は宗教上に於ける奇蹟は凡人の到底眞似得べからざる事とのみ確信し居り、而して宗教上の奇蹟の顚末の概要を調べて見たるに、悉く催眠學上の現象に外ならざることを感ずるに至りて、意外に堪へずして大に失望したり、余は催眠術の原理にては到底說明し得ざる事實の奇蹟存するならむと信じたるに、豈計らんや催眠術によれば本書に列記したる宗教上の奇蹟より未だ〳〵幾增の奇怪なる不思議なる事をなし得ればなり、宗教上に於ては催眠術の原理によることをば知らずして、偏に神佛の靈驗にのみよると信ぜしならむ、昔時の如き教育の程度低き時は斯かる間違ひたる說明卽ち迷信に期するを以て可なりと雖も、日進の學を修めし今日に於ては科學的に說明せざるべからず、若し科學を無視して徒らに神祕を說かんか、獨り其說行はれざるのみならず、世の笑ひを招くに至らむ、實に此世に於ける不思議の解決は催眠術に如くものなし、依て宗教上の奇蹟以上の不思議を實

行し見むと欲する者は、催眠術を大に研究すべきなり、如斯余は之を獨斷す、故に催眠現象を起す方法は、換言すれば奇蹟を實演する手段とも云ふべきなり、果して然らば、催眠現象を起す方法は如何、之れについては其事を專問に記せる拙著、催眠術獨稽古に讓りて爰には單に其法を一言するに止めむ。

一、被術者をして必ず己は催眠術を施さるれば催眠するとの確信を抱かしむること。

二、術者は必ず催眠せしめ得と確信して毫も疑はざること。

三、被術者を直立せしめ置き、呼吸を算せしめつゝ、催眠凝視球を眼前に近づけ見詰めしむること、二三分時にして閉目せしめ、身體を靜かに横臥せしめ、眼の上にハンケチを覆ふ。

四、頭部より足部に向つて輕く撫で下ぐること數回。

五、眼瞼を輕壓し又はコメカミ動脈を壓迫し、或は前頭部を輕柔す。

以上の諸法にて既に催眠するものなり、若し之れを一通り行ふも、尚催眠せざるときは(四)と(五)との方法を何回にても繰り返すなり、催眠せしと思はゞ兩手を擧げさし置きて、其手は寄りて掌と合すと暗示すれば其通りとなる合せし手掌は開く、其手は下る、其手は上るといふ暗示をすると、其通りになるものなり、其れが甘く成功せば其手は動かずと暗示をなせば其通りとなる、之れ卽ち不動金縛の現象なり、之れが成功せば次には生木を示して枯木なりと暗示し、木像を示して今首を動かし居る故見ゆるならんと暗示すれば、其通りに見ゆ、之れが成功せば次には何者もなきに雲間に神聲聽ゆるならむ、と云へば神聲聽へ、何者もなきに彌陀佛の像見ゆるならむ、と云へば眞に彌陀佛の像見ゆ、爰に至れば宗教の奇蹟と稱する現象は何一として行はれざることなし、催眠に感ずる性質の鈍き者に對しては、前記の如き手數を要するも、催眠感性の高きものに對しては、前記の如き形式を要せず、突然奇妙の現象を起すことを得べし、催眠法に就ての詳細は專問の書冊に讓り、爰には順序上一言せしに過ぎず、催眠術によると以上述べたる奇蹟の現象に止まらず、尚進んで今日豫想すること能はざる大不思議を後來行ひ得るに至るや必せり、彼の電話や電燈の事を百年前に於て豫想し談話したりとせば、人或は狂人を以て目せしならむ、其れと同樣に今日吾人が豫想し能はざる大不思議のことを後來なし得

るならんよりて益〻之を研究せられむことを切望する所以なり。

宗教奇蹟研究 終

宗教奇蹟研究
定價金四拾錢

明治四十三年一月二十日印刷
明治四十三年一月三十日發行

著作兼發行人 東京市芝區愛宕町一丁目二番地 古屋景晴
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
印刷人 中野鐵太郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所 東洋印刷株式會社

不許複製

發行所 東京市芝區愛宕町一丁目二番地 精神研究會
電話 芝一九三四番
振替貯金口座二三五一番

大賣捌所
東京日本橋區本銀町 太洋堂
東京神田區表神保町 東京堂
大阪市東區北邊渡町 杉本書店
東京本郷區本富士町 文光堂
東京神田區表神保町 上田屋
東京京橋區南鍛冶町 三松堂
東京京橋區尾張町 東海堂
東京神田區小川町 勉強堂

精神研究會發賣廣告

年四回春夏秋冬發行

精神治療新報

本誌には每號博士學士の高論を集錄し、且本會々員の動靜を報道せり、本誌を每號を添へずして催眠術を口にする資格ありや。

定價郵稅共
金拾貳錢

精神研究會發賣廣告

博士學士大家論集

不思議の研究

（寫眞版木版摺插入菊大版壹百拾貳頁）

定價郵稅共
金四拾四錢

（目次）●不思議の現象（不思議の死、不思議の降石、化物屋敷の一室、明因なくして物品學ぶ）理學博士橫山又次郎●夢中遊行症に就て（天の聲あつて我を呼ぶ、英國利場の煙と成つた）醫學博士神保三郎●孤立せる精神能力（而自在に人の性質を變ず、美男美女を得る）農學士細來友吉●意の儘に人間を造る法（色男に金と力とを與へ、美人を長命ならしむる新法、自由自在き實驗、心理學的說明）文學博士細來友吉●外山龜太郎●心靈的現象（幽靈が出る、色々の不思議を行ひ、靈智學會、無限の不可思議、死人の魂來人皆驚き、幽靈話も解釋す、出來事を未然に豫知す、肉眼無くして視得、自由自在に空を飛行す、己れの死する日時を豫言し、文學博士福來友吉●精神病は傳染す（怒し悲愁、狼狽、羞恥などに關して）醫學博士吳秀三●生兒の男女を孫め判定する法（男女の神つき、文學博士福來友吉●精神病は傳染す（怒し悲愁、狼狽、羞恥などに關して）醫學博士吳秀三●生兒の男女を孫め判定する法（男女の平均）醫學博士ロンム●病は氣からと云ふ昔、葉の實證（喜怒哀樂の極點、驚いて腰を拔かす）醫學博士井上圓了●夢中遊行症（不思議なる狀態、二重意識とは如何）醫學博士ネ村德衛●幽靈談（何物か白い顏を出して去る）醫學博士井上圓了●物質を支配する精神の力（靈魂の作用）理學博士石川千代松●腦病神經病精神病との區別）醫學士田村化三郎●讀心術（人の意中を見拔く人、精神が其方に集中）理學博士橫山又次郎●惡癖改良の辨（神經病と精神病との區別）醫學士田村化三郎●讀心術（人の意中を見拔く人、精神が其方に集中）理學博士三宅秀●文明と神經衰弱（過高の道德、過勞の重荷）醫學士川村寧次●美人の賣格（妙齡の女子、美顏術、為缺けには入れ歯）文學博士今村新吉●人の死と怨嗚（重に氣壓に關係す、ソレ幽靈）文學博士井上圓了●冷水摩擦法（乾布、溫濕布、冷濕布、冷水淺布、冷水淺漬）醫學博士遠山椿吉●吾が身の缺點を矯正したる余の實驗、（缺點は飽くまで矯正せよ、毛嫌を矯正したる予の實驗、怒力なども柳制したる予の實驗）法學博士新渡戸稻造●精心と疾病との關係（實際病は氣の持ち樣）醫學博士山極勝三郎●絞殺されたる時の必地（愉快なる一種の氣）神學博士パスツール●心靈的現象研究（非常に驚き死人の靈と語る）文學博士元良勇次郎●潛在意識の研究（不思議なる現象、意識以外に働く精神活動）文學博士姉崎正治●身體鍛練術（醫學博士高木兼寬●幽靈生活の狀態（靈魂は瓦斯體、人間の死後靈魂の住所は何處ぞや）倫敦大學教授理學士テアルベ●迷信（迷信は理窟のみにて除去る能はず、不動樣の御罰）理學博士坪井正五郎●幽靈は確に在る、靈魂分子、靈體自身の動指運動）文學博士タルベ●潛在意識に就て（心靈說や隱秘教、無意識的精神生活、自働的書記、靈妙不思議の働）慶應義塾大學講師川合貞一●假死と睡眠（腦髓を切斷せる狀態）醫學博士松岡道治●人世二百年（動植物の壽命、如何にせば二百年の壽命を全ふし能ふや）醫學博士松下禎二●精神的養生法と肉體的養生法（醫學博士二木謙三●陶宮術（運命轉換法）天元術、氣質變化術）吉良延●西洋夢判斷（惡戰夢、逆夢、綿靈）佐藤華光●意識の統一（意識の生理的要件、忘我の境）佐伯政之助●神道の奇跡と神慮探湯、火渡、劍渡、簡單なる咒法によりて天より火氣を呼び下す、神慮小伴を除知す）文學士坪永茂助●精神的治療法（鎮天動地の大事件、心氣一轉●鬼神論（人鬼とは人の死したる靈魂の事、靈妙なる處人をして驚嘆せしむ）文學博士高瀨武次郎●酒客治療法、醫學博士片岡良●人格修養（人格とは何ぞや、偉大なる人格）文學博士元良勇次郎●睡眠の必要（睡眠は長壽の根本）高山憲定●誰にも出來る人相鑑定ドクトル兒玉佐治●胃腸劍練法（腸胃は習慣の附け次第何うでもなる、胃は又金でも石でも消化し得る）醫學博士長興稱吉

精神研究會出版廣告

古屋鐵石著

催眠宗教論

定價郵稅共
金四拾四錢

目次◎催眠論▲緒言▲（物質的時代●精神的時代●宗教は情か知か信か）▲催眠術とは何ぞや▲（重病者卽治例●不敬者矯正例●煩悶者救濟例●錯覺幻覺天眼通●心身相關と聯想作用）●宇宙の大精神●不動の精神●大覺解脫と催眠狀態●坐禪と自己催眠●觀法と自己催眠の幻覺●人格變換と佛教●精神力により見たる催眠の原理▲催眠の原理（心理說、精神振動說、折衷說）●宗教上の奇跡と催眠術の現象▲（宗教上の奇跡と催眠術）▲催眠術と宗教との交叉點▲（催眠術と宗教とは何ぞや●三界唯一心と催眠狀態●靈照律師の奇跡論●六神通力（天眼、天耳、神足力、宿命、他心、滿願）と催眠術とは一種の宗教なり●學者の論爭）◎宗教論▲宗教とは何ぞや●予段を同ふす●範圍を同ふす●效果は催眠の方大なり●催眠術は一種の宗教なり●學者の論爭）◎宗教論▲宗教とは何ぞや●知者の定義●著者の定義●知神と信賴●安心立命）▲宗教の心理的起源▲（無常觀と弱小觀●神人合一の努力●彼此の定義●諸大家の定義●著者の定義●知神と信賴●安心立命）▲宗教の心理的起源▲（無常觀と弱小觀●神人合一の努力●彼此の神の分）▲宗教の歷史的起源▲祖先崇拜說（動物崇拜、水石崇拜、天然崇拜、靈魂崇拜）▲宗教の種類▲天然崇拜（動植物崇拜、天然崇拜）●靈魂崇拜●祖先崇拜教●庶物崇拜教●（劣等人文教、高等人文教）●神話的崇拜教（多神教、單一神教、交替神教、唯一神教）●律法的宗教●倫理的宗教●宗教の教義▲宗教意識發點の四階段（己の爲に己を愛す、己の爲に神を愛す、神の爲に己を愛す）●自我教理●我がおるは天功が輔けんが爲なり▲宗教と迷信▲知的判斷の觀點●迷信とは宗教の病的狀態●迷信とは不合理なる宗教的信仰●宗教の本質●神の直覺●不可思議超批判の事象▲宗教と學術▲宗教と哲學●哲學と宗教とは目的起源及び心理上に於て異なる●生滅的（抽象的理論的と具體的微說的）●目的上の差（他力的强迫的社會的）●批評的）●影響と勢力との差（一部的と陶冶的）●科學▲科學と自力的個人的●科學の爲に宗教を進めし點●感情と智性との別●信仰と認識との別●宗教の境地と科學の境地●人心を支配し得ると否と●宗教の衝突點●科學の爲に宗教を進めし點●感情と智性との別●信仰と認識との別●宗教の境地と科學の境地●人心を支配し得ると否と●宗教の送▲宗教と倫理▲目的起源の一致●自力綿道法と他力依遇●極圓の異同●倫理に反せる宗教あるか●倫理とは何ぞ▲宗教と否との關係●教育止に特種の宗教を信ぜしむるの可否▲成立宗教▲佛教と教育▲教育の目的●宗教を做んじざる教育の弊●國民教育と宗教との關係●教育止に特種の宗教を信ぜしむるの可否▲成立宗教▲佛教と小乘と大乘との意義●五時の範圍（漸極的退守的偏執的と積極的進步的達觀的）●解深密教の析說●人我空●我法俱空●非有非空中道妙理）●楞大乘と實乘との意義（消極的退守的偏執的と積極的進步的達觀的）●解深密教の析說●人我空●我法俱空●非有非空中道妙理）●楞大乘と●教禪の意義（教外別傳不立文字直指人心見性佛●頓漸の意義（離行道と易行道、聖道門と淨土門）▲基督教▲基督の本旨●ポール神學の要旨●三位一體說●神人說●原罪及び神恩說●原始基督教所說の概觀●佛基主教の異同●佛耶二教一致の點（世界的、倫理的、自律的）●相逆の點（理智と感情、靜的と動的、絕對的平等觀と相對的平等觀、狂熱過激と冷灰枯淡、他力的と自力的、精神解脫と信賴救濟▲理想の宗教▲倫理的●合理的●社會的●宗教の効果●邪教とは何ぞ●宗教の大革命

宗教と催眠術とは目的手段範圍を同ふし、效果は却て催眠の方大也、本書を讀んで如何なる宗教を信ずべきかを知れ。

精神研究會發賣廣告

▲言ふに云はれぬ面白味あるプランセット▼

プランセット
（一名米國の狐狗狸）

定價金壹圓十錢
郵送料
內地金十二錢
臺灣清國參拾錢

本具は一種の玩具に過ぎざるも、催眠心理學上の實驗具、家庭娛樂の滑稽具として米國の家庭にては必ず一個を具ふと云ふ、依て本院にては米國より原物を取寄せ、原物に違はぬ樣摸造し同好の士に分ちたるに、幾何もなくして面白き結果を得たりとの報告續々あり、本院實驗用として製造せしもの餘分あり、何人にも直に使用し得らるゝ樣使用法を附して希望者に分讓す、

▲近頃不完全の僞物を到處に販賣せり御注意を乞ふ

古屋鐵石著　價郵稅共四拾四錢

獨習自在自己催眠

催眠術を知らぬ者でも此書に基き實踐せば、自己で自己を催眠せしめ自己の病癖を治することを得、主效は、

神經衰弱、腦病、吃音、記憶減弱、神經病、不眠症、寢小便、船車暈、眼病、胃腸病、泌尿生殖器病其他藥にて治せざる病氣

なり、彼の降神術、見神術の現象も自己催眠によりて起すを得、實に自己催眠は煩悶を拂ひ精神を修養し無病長壽を圖るの良法なり

精神研究會出版部
博士書院
東京市芝區愛宕町一の二
振替貯金口座東京一五七一三番
電話芝一九三四番

精神研究會講師古屋鐵石述

催眠術獨稽古

附 動物催眠法

菊版壹百拾六頁
實驗の圖插入
定價金四拾錢
郵稅金四錢

本書は多年間催眠術の通信教授をなし會員をして**成功**せしめたる實驗に基き、**催眠の奧義**を獨りにて稽古せらるゝ樣最も簡易に記述したるものなれば素人之れを一讀すれば直に催眠術を**自在**に**行ひ奇々妙々**の現象を呈せしむることを得、催眠術家之れを一讀すれば從來の實驗上意の儘にならざりし點をして、悉く意の儘ならしむるを得ることは、本會責任を以て確く**保證**する所也。

（本書は催眠術教科書に掲げしを更に一書としたる者也）

目次大要●催眠術は何人も學ばざる可らざる所以●催眠術の沿革▲催眠術の起原▲動物磁氣說▲神經病的說▲暗示說▲第二自我說●靈魂說●施術室の裝置●感受性の強弱鑑別法●催眠せしめる方法▲催眠術の原則▲心理的催眠法○言語催眠法○隔地催眠法○間接催眠法○閉眼催眠法○凝視催眠法○暗室催眠法○音調催眠法○呼吸催眠法○撫接催眠法○嗅覺催眠法○強制催眠法○筋覺催眠法○一喝催眠法○一睨催眠法▲自分で自分を催眠せしむる方法▲メスメル派の催眠法▲ナンシー派の實驗例▲實驗例▲著者の實驗例●催眠狀態の性質●意思の聯合（ラポール）●催眠の暗示●睡眠と催眠との關係●催眠狀態の階級▲淺睡狀態▲不隨意運動●催眠狀態と暗示●催眠の深淺と暗示との關係●暗示の生理的作用●暗示と精神との關係●肉體組織の變化●幻想とは何ぞや●錯覺の幻想●生理的作用の變化●感覺の鈍麻●人格の變換●意識の移轉●天眼通●神通力或は千里眼●火箸を曲げる術●身體の不隨意運動●棒を奇せの術●暗示に惑ふ理由●覺醒法

萬人々々萬人悉く催眠せしめ得る方法

附錄 **動物催眠法**

目次大要●雞、蛙、蛇、蜥蜴、魚類、犬、猫、馬、河蝦、烏賊、天竺鼠、蟻を催眠せしむる方法▲心理學上及び生理學上動物催眠の原理

附其他雜錄數十件

精神研究會發賣廣告

（特別大割引改正定價表）

書名	著者・發行	定價
●獨習自在 座禪之奧義	禪學研究會著	價參拾貳錢郵稅共
●新案 記憶力增進法講義	大日本記憶學會著	自一卷至四卷一冊揃價八拾錢郵稅四錢共
●催眠診斷學	醫科大學志賀先生著	價四拾錢郵稅共
●催眠法律論	古屋鐵石著（催眠術新報增刊）	價貳拾錢郵稅共
●煩悶消失快樂增進法	雨宮、古屋兩學士著（催眠術新報增刊）	價貳拾錢郵稅共
●腦及神經健全法と記憶力增進法	大日本記憶學會著	價四拾四錢郵稅共
●西洋獨按摩術	醫科大學志賀先生著（催眠術新報增刊）	價拾錢郵稅共
●催眠術治療法	古屋鐵石著	價四拾四錢郵稅共
●催眠心理學	上野文學士著	價四拾四錢郵稅共
●男女無錢東京遊學之秘訣	雨宮學士著（催眠術新報增刊）	價貳拾錢郵稅共
●催眠術博覽會	催眠術新報增刊	價貳拾錢郵稅共
●愛妻	催眠術新報增刊	價貳拾錢郵稅共
●柔術劍棒圖解秘訣	井口松之助著	價參拾四錢郵稅共
●不思議の研究	博士學士大家論集	價四拾四錢郵稅共
●催眠心理治療帖	古屋鐵石考按	價壹圓郵稅共
●催眠術治療具	パーキンス博士發明	價八拾貳錢郵稅共
●神秘哲學	高橋五郎著	定價五拾錢郵稅八錢菊版百頁
●催眠術新論	花澤文學士著	價貳拾四錢郵稅共
●文章演說取締法規詳解	雨宮學士著	價參拾錢郵稅共
●催眠術繪葉書	大日本催眠術協會發行	木版三色刷各一組七枚價各拾錢郵稅共
●催眠術實驗圖	古屋節編輯	額面川石版畫價拾錢郵稅共
●健腦術	催眠術新報臨時增刊	價拾錢郵稅共
●催眠凝視球	大日本催眠術協會考案	價六拾錢郵稅共
●催眠術雜誌	年四回發行	壹冊價貳拾五錢郵稅共
●催眠學術新論 薰習講話	大野美恐丸著	價九拾貳錢郵稅共
●ブランセット	博士書院製	價壹圓內地送料拾貳錢

精神研究會新刊廣告

古屋鐵石著（最新刊）

男女運命豫知術

一名プランセット術

菊大版九拾貳頁寫眞版木版挿入　價郵共四拾四錢

プランセットとは何ぞや◎フラヘットとは何ぞ○プランセットの沿革○日本に於けるプの元祖◎プランセットに類せる術▲人格變換術○人格と性格との別○人格變換の根本的事實○數個に分裂したる人格○催眠術による人格變換の實例▲狐狗狸術○コックの構造○使用法と原理○井上博士の實驗と學說▲机轉術（ティプルトルニング）▲机轉術を行ふ方法○ゴットフレー氏元良博士の實驗談○論理▲自働書記術（オートマチック、ライティング）○自働書記の現象○福來博士の說○カーネ氏の實驗○著者の實驗○自働書記による天眼通的實驗○理論○高島平三郎氏の說▲水晶凝視術（クリスタルゲーツング）水晶凝視とは何ぞ○水晶凝視を行ふ方法及び其效果○原理▲心讀術（サイコメトリー）○心讀の現象○其方法○平井金三氏の說○理論▲鬼神術（スピリチュアリズム）○鬼神術の現象○幻妙不思議○井上元良博士の說◎プランセット使用法○金と女とに對する運命とプランセット○米國に行はるゝ使用法○使用上注意すべき點○金錢の成否を占ふ法○米相場の高低を前知する法○配偶者の選定方を占ふ法○如何なる配偶者に緣あるかを占ふ法○病氣の治法を占ふ法○如何にせば目的を達するかを占ふ法○龍靈の聖凶を前知する法○金と女との不足を警する法○女の心を知る法○吉凶の前知を占ふ法○戀春○プの通信を避くべき事◎プランセット實驗例○外國大家と我國人との實例○平井金三氏と朝比奈米作氏との實驗◎プランセットの活動する原理○福來博士の說○潛在的精神とは何ぞや○精神分裂とは何ぞや○信用厚き學者の說○參考書名

古屋鐵石著（最新刊）

驚天動地　反抗者催眠論

菊大版壹百頁寫眞版木版挿入　價郵共四十四錢

緒言◎抗反せる鳥獸を催眠せし實驗◎反抗せる人間を催眠せし實驗◎反抗者を催眠せし實驗◎暴行せる狂人を催眠せし實驗◎反抗者に手を觸れずして催眠せしめし實驗◎心と心と談話せし實驗◎催眠術を施さるゝことを知らずして遠く離れ居る者を催眠せし實驗◎不承諾者を催眠せし實驗◎術者と患者と遠く離れ居りて催眠治療を行ひし實驗◎諸博士立會の上遠方に居る者を催眠せし實驗◎被術者反對に施術者を催眠せし實驗◎麻醉藥を用ひて行ふ催眠法◎大家の常に行ふ催眠法◎メスメルの催眠法◎プレートの催眠法◎ベルンハイムの催眠法◎リエボーの催眠法◎シャーコの催眠法◎イズデールの催眠法◎フアリアノ催眠法◎ボーニスの催眠法◎ヴエツターストランドの催眠法◎ヴアンイーデン及びヴアンレンバーゲヒムの催眠法◎リッチエトの催眠法◎ルイスの催眠法◎ヴオイレンの催眠法◎プラムウエルの催眠法◎ベルケルの催眠法◎ラセムの催眠法◎レンバーシムの催眠法◎フロワーの催眠法◎ゲスマムの催眠法◎リシゲーの催眠法◎ハンセンの催眠法◎熊代先生の催眠法◎福來博士の催眠法◎結論

精神研究會發賣廣告

文學博士　井上圓了　先生序
文學士　堀内複人　先生校閱
古屋鐵石編著

驚神的大魔術

菊大版壹百五十八頁＊價郵共金六拾四錢

●緒言　寅術とは何ぞや●不可思議と不可知●寅術の定義●物質的寅術●精神的寅術●不思議の現象と催眠術の關係●木葉を紙幣に見せる術●過去現在未來のことを知らす具●其構造法と使用法●實驗例●精神の顯在潛在とは何ぞ●人格變換とは何ぞ●ピーネー氏と福來博士との說●

●米國狐狗狸術（プランセット）

●日本狐狗狸術　構造法と實驗例●井上博士の實驗と說明●

●降神術（スピリチズム）　今日醫士が行ひつゝある催眠術の區別●信仰療法●口寄術●梁氣術●中座術●祭言術●交靈術●神人交感術●交靈術●加持祈禱●易筮術●天源術●淘宮術●占夢術●似非降神術●禁厭術●見神術●見佛術●神とは何ぞや●佛とは何ぞや●見神自在法●井上福來兩博士の說●バテレン術●靈魂の滅不滅●靈魂と幽靈との異同●生靈術●死靈術●人魂變現術●狐火術●幽靈對話術●人三化七出沒術●佛の祟●鬼門●方位●相性●緣起●日柄●迷信の原理●眞言秘密術●眞言秘密とは何ぞや●護身法と九字●眞言秘密術●催眠術●無線電信的精神の感應●遠感術●思想交通術●著者が伯爵邸にてなせし實驗●座ながち遠方の情況を知る法●縮地術●天耳通術●神通術●遠視術●未來知術●靈天動地の實驗●學理上の根據●天眼通術（クレボヤンヌ）●石油火中通過術●火渡の方法及び原理●歐米人を驚かしたる火渡の實驗●火渡術　鎭火術●狐憑術●飯綱遣術●管狐術●人狐術●犬神術●狐化術●狐を憑ませし老狐●科學的說明●狐遣術●心讀術必要の理由●療心術●讀想術●觀心術●實驗の方法●現象と理論●井上博士と ピネー氏との說●士相術●手相術●面相術●瓜相術●秘密看破術●骨相的心理矯正●心性學の眞髓●市川高橋兩博士の說●身體隱現術●隱身術●隱形術●忍術療法●忍術●骨相術●幻術療法●待機療法●食療法●斷療法●奇怪の現象●延年術●長命術●尺地術●吸氣術●天人術●天源發氣術●感通醫術●仙術●幻術●武士道の骨子●腦力鍛練術●人心操縱術●氣合術●劍を呑み火を掴む術●棒寄術●寄棒術●開棒術●實驗例と學理●井上博士の說●火箸曲術●小指にて鐵棒を曲げる術●實驗と學理●武道竹折術●空竹折の光景●武道の極意●物理的心理的說明●男女交際的魔術●交際と成功との關係●寅術的男女交際の極意●色寅術●地獄極樂漫遊術●大極●法●性●天帝●心●精神とは何ぞ●結論●

（秘密圖七個挿入）

824
162

精神研究會新刊廣告

精神研究會長古屋鐵石著　定價郵稅共金四拾四錢

人生禪獨修法

（既刊）

素人用坐禪獨習の書としては目下の處此書に優るものなからむ

精神研究會長古屋鐵石著　定價郵稅共金四拾四錢

學理應用家庭禁厭術

（未刊）

迷信の利用に非ず學理の應用にて自己又は他人の惡癖或は病氣を「まじなひ」にて治す不思議の法を詳述せり、催眠術の治療を忌む者も「まじなひ」は喜んで受ける傾きありて頑迷者の身心を救ふには最も適せり。

日本東京
医芝
精神研究會

824
16

013608-000-9

324-162

宗教奇蹟研究

古屋　鉄石／著

M43

ABA-0077